今日も平和だ、向島一家！

かまたかま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
今日も平和だ、向島一家！

【Ｎコード】
Ｎ８２６０Ｏ

【作者名】
かまたかま

【あらすじ】
今日も明日も平和な日。
（概ね普通時々変人の）優しい父と（自然の摂理に反しているが）優しい母。（ちょっと頭が弱いとも言う）素直な娘。
向島一家の日常は続くのです。
何も考えないでお楽しみ下さい。

※猫と僕とのショート・ショートの向島一家をメインにした作品です。しかし、本編を読まなくても差し支えありません。主に会話文で構成されています。
時系列等は本編とは関係ありません。また、この作品はフィクションです。実在のいかなる団体個人、地名、作品等とは一切関係ありません。

秋の夜

秋の夜。平均的な一軒家のリビング。この家の大黒柱、向島光太郎はテレビを眺めていた。

「……尖閣諸島、か」

若い頃の面影を残したままの精悍な顔が、少し険しくなる。しかし、それは美形と言える顔立ちを助長するものでしか無い。長めの髪の下に刻まれた皺は大人の男の色気を出し、細く締まった体躯の立ち振る舞いは淀みない。中年男性の理想像とも言うべき姿だ。

ソファに深く腰を掛けている光太郎の隣に、向島まきるは暖かいココアの入ったカップを持ったまま座った。

「ふぅ、お父さん。あたし九時からテレビ見るけど良い？」

ずず、とココアを啜る唇は身長に比例したように小さい。小振りな鼻とそれに反比例したように大きな瞳。整った配置のそれらは彼女の性格通りに良く動く。高校生なのに、ともすれば中学生に見えるのはご愛嬌。肩に届くか届かないか位の黒髪は滑らかで、全体的な雰囲気と合わせて思わず撫でたくなる魅力がある。

光太郎は壁に掛けた時計を見た。九時まで後五分。

「ああ、そういえば言ってたね。リモコンはそこにあるから」

「うん、ありがとー」

にへら、と笑うまきるを見て光太郎も微笑んだ。

「光太郎、ココア置いとくぞ。最近夜は冷えるから気を付けろよ」

そう言って妻であり母でもある向島翔子は背の低いテーブルにカップを二つ置き、自分も隣の一人掛けのソファに座った。

腰に届く程の豊かな金髪。地毛ではなく染めているが、不自然さは無くただ綺麗だ。身長はまきるよりも僅かに低い。体に比べて長い手足は華奢で、一見すれば西洋人形のようだ。実年齢にそぐわない幼い容姿は非常に整っているが、下手をすれば娘であるまきるよりも年下に見える。

「翔子さん、ありがとう」

世界中の美を集めた愛しい横顔に礼を言い、光太郎は目の前に置かれたカップを取った。

暖かい。

「まきる、何のテレビを見るんだ？　またつまらねえバラエティか？」

「違うよ、今日はずっと見てたドラマの最終回なのっ。ほら、先週ヒロインが黒幕だった、て超展開だった」

「ああ、あれか。あれはあたしも気になるな。全然その前まで見てないけど」

「でしょ？　どうまとめてくるかこの一週間楽しみだったんだからっ」

妻と子の話し声を聞きながら、光太郎は時計を再度見た。

「二人とも、そろそろ九時になるけどチャンネルは変えなくて良いのかい？　私はもうニュースを見たから良いよ」

「え？　……お、お父さんっ、リモコンどこっ」

「ほら、そこのテーブルの足下」

「あ、あった！　え～と、何チャンネルだったかなぁ……」

次々に変わるテレビの画面。九時まで後十秒。

「あ、あったあった、ここだ。良かったー」

「さて、どうなるかな」

「……ドラマか。久しぶりに見るなぁ」

深くしっかりと座る光太郎。背筋を伸ばして姿勢良くテレビに向かうまきる。だらけたように背もたれに体重を預ける翔子。

三者三様だが、三人の手には暖かいココアがある。

時計は九時を差し、テレビの画面に役者が映る。

三人は同時にココアを啜った。

引き出し

向島家の階段の真下にあたる部分には物置がある。その中の引き出しをまきるはまさぐっていた。

「……んー、ないなぁ」

「まきる、どうしたんだい？」

「お父さん、あたしの冬用の体操服知らない？」

「体操服？　なんでまた」

「んとね、これからまだまだ寒くなるから、部屋着の一つにしようと思って」

「ああね。体操服か……ちょっと分からないなぁ。翔子さんなら分かるかもしれないけど」

「分かった。お母さーん！　おかーさーんっ！」

ガチャリ

「何だよまきる。どうした？」

「お母さんっ、あたしの体操服ど……こ……」

「体操服？　ああ悪い、寒かったからあたしが借りてた。すぐ使うか？」

「……ううん、良いよ。お母さん使いなよ……」

「ん？　まあ、あたしは助かるから良いけど。んじゃ昼飯がもうすぐ出来るから、少ししたらリビングに来いよ」

「うん……」

ガチャリ

「……胸が」

「まきる？」

「胸の名前がびよーんって、びよーんってなってたっ！」

「……んー、まあ、まきるはまだ高校一年生だし」

「向島がむこーじーまーになってたよっ！」

「ま、まあ、そうだね」

「お父さん、どうしてお母さんはあんなのなのに、あたしはこんなのなのっ！？　理不尽だよ、おーぼーだよっ」

「そう言われてもなぁ……あっ」

「どうしたのっ？　やっぱり何か秘密があるの！？」

「そういえば翔子さんは昔から野菜とか納豆とか良く食べていたような……」

「おかーさーんっ！　お昼にサラダと納豆追加してっ！　お願いします、後生だか……」

バタバタ、ガチャリ

「ふう、行ったか。真っ赤な嘘だけど健康に良いし問題無いか。……翔子さんが高校の時にはあのスタイルだったことは言わないで良いよね？」

充電器

向島家のリビング。翔子はソファに座る光太郎に話しかけた。

「光太郎、携帯の充電器貸してくれ」

「充電器？　いつも使っている自分のはどうしたんだい？」

「なんか調子悪くてな。だからおまえのを貸してくれ」

「貸してくれ、って言われても私の携帯とは違う会社だから繋がらないよ」

「なんでだ？」

「なんでって、そりゃ規格が違うからね」

「規格？　結局充電するのは変わらねえだろ？」

「そりゃそうだけど、まずささらないよ」

「やってみなきゃわかんねえだろ」

「まあ良いよ。はい」

「……ふんっ」

バキッ

「……」

「あれ、ささったけど充電しねえぞ？　おまえの充電器も壊れてるんじゃねえか？」

「……うん、いま壊れたよ。翔子さんの力の強さを忘れてた」

「ん？」

「いや、何でもない。よし、今から買いに行こうか。ついでに携帯ショップにも寄ろう」

「あ、それならついでにスーパー行こうぜ。今日は魚が安いんだ。晩飯、楽しみにしとけよ」

「分かった、楽しみにしとくよ」

「おう。じゃあ支度してくる」

パタパタ

「……一緒に買い物なんて久しぶりだ。ふふっ、ついでにプレゼントでも買うかな。充電器よりうんと綺麗なアクセサリーでも」

煙草

向島家のリビングには主に食事用の通常のテーブルと、ソファを周りに置いた歓談用の背の低いテーブルの二つがある。まきるはソファに腰掛けてテレビを見ながら、通常のテーブルで同じようにお茶を飲みながらテレビを見る翔子に話しかけた。

「お母さんお母さん」

「なんだよ」

「お母さんって、昔はワルだったんだよね？　煙草は吸ってたのっ？」

「煙草？　いや、煙草は吸ってねえな。一回吸った事があるけど不味くて駄目だった。んな良いもんじゃねえぞ、あれは」

「へー、吸ったことあるんだ」

「ああ、昔は光太郎が吸ってたからな。一本貰った。まきるを産む前の学生時代の話だから……二十年近く昔の話か」

「へー……って、お父さんが煙草吸ってたの！？　何だか意外だよっ」

「はっ、意外だろ？　あいつは優等生みたいなツラ被ってる癖にそういう腹黒のとこがあるからな。あたしもそれ知ったときは驚いた

ぜ」

「ほえー。んと、それで、どうしてお父さんは煙草辞めたの？」

「んー……色々、だな」

「色々、なの？」

「ああ、色々だ。大きい事とか、小さいこととかが重なってな。きっかけなんてそんなもんだろ」

「うーん。お父さんと煙草かぁ……」

「間違ってもあいつに『煙草吸ってる姿見せて』とか言うなよ。今値上がりして高いんだから」

「うっ！？　見抜かれてるっ！？」

「何年おまえの母親やってると思ってんだ」

「ちぇー」

ガチャリ

「ふう、良いお湯だった。……あれ二人とも、私がどうかしたかい？」

「んーん、何でも無いよ。ねー？」

「おう、何でも無えよ。なー？」

「え？　何この疎外感……いや本当に何？」

ぬいぐるみ

向島家のリビングで翔子は家計簿をつけていた。

「あー、家計簿はいつまで経っても慣れねえなぁ。計算は苦手だ……」

ガチャリ

「ただいまー！」

「おう。おかえり、まきる」

「えへへー。お母さん」

「ん？」

「はいっ、プレゼント！　いつもありがとうねっ」

「何だよいきなり。……ぬいぐるみ？」

「うん、黒猫だよっ」

「……ったく。いい歳した大人にぬいぐるみかよ」

「お母さん似合うから大丈夫だよ」

「それが嫌なんだよっ」

「まあまあ。じゃああたし着替えて来るね」

ガチャリ

「……もふもふ。……誰も居ないよな？」

ギュ

「……可愛いな、こいつ。……よし、お前の名前はジョセフ二世だ」

モフモフ、スリスリ

「……お父さん、お母さんって本当にお母さんなの？」

「当たり前じゃないか。いやー作戦大成功。ぬいぐるみをあげればこうなることは自明の理！　それを覗き見て癒される！　我ながら自分の策に身震いする……翔子さん愛してるよー！」

「うん、お父さんがお母さん以外と結婚するはず無いね。間違いない」

ピザ

向島家のリビングでソファに座ったまま、まきるは隣の翔子に話しかけた。

「お母さん」

「あ？　なんだよ」

「ピザ食べたい」

「ピザ？　なんでまた」

「んー、今すごくなんとなくそう思ったから」

「ピザねぇ。……まあ、今日は却下だ」

「えー、なんで？」

「もう今日の献立が決まってるからな。諦めろ」

「ちぇー」

夕飯の時間

「ほら、今日の飯はこれな」

「わーいっ、今日のご飯は何か……な……」

「翔子さん。なんでオムライスなのに、ケチャップの文字がピザなんだい？」

「わがままな娘の要望に応えてやったんだよ。ほら、食うぞ」

「そうなんだ。まきるもよく分からないこだわりがあるもんだね」

「……違うけど美味しい。……ああっ、でもなんか悔しいっ」

つまようじ

夕食後、光太郎はつまようじを手に取る。

「んー……歯に物が詰まって取れない」

「お父さん、そういうのは歯磨きするか、放っておくのが良いんじゃない？」

「でも気になるじゃないか」

「仕方ないよー。取れないものは取れないんだから」

「……やっぱり気になるなぁ」

「お母さんにでも取って貰ったら？」

「まきる」

「？」

「今度何か買ってあげよう。ふふふ、翔子さんっ、待っててねっ」

「あっ！　……冗談だったのに本当に行っちゃった……あ、お母さんに殴られた」

コーヒー

台所で翔子はコーヒーを淹れている。

「ほら、光太郎。出来たぞ」

「ああ、ありがとう」

「……」

「ずず……うん、美味い」

「なあ」

「ん？　なんだい？」

「コーヒーのどこが美味いんだ？」

「どこがって……苦いところ？」

「ふーん。あたしにゃその良さがさっぱりだ」

「なんて言うかな。私の場合は仕事で小説を書くときに必須だし、言わば頭を切り替えるスイッチ、みたいな部分もあるかな。たまには飲んでみる？」

「んー、じゃあ一口」

「はい」

「ずず……苦い……」

「ははっ、それはブラックだしね。まあ、翔子さんも大人になれば分かるよ、って痛っ！？」

「あたしは大人だ！　馬鹿やろうがっ」

シャーペン

テーブルでパソコンを使う光太郎に、まきるは話しかけた。

「お父さん、仮に、仮にだよ」

「ん、突然どうしたんだい？」

「仮に、凄く書きづらいけどいつまでも芯の出るシャーペンと、凄く書きやすいけどすぐに芯の無くなるシャーペンがあったら、どっちを使う？」

「仮に、ねぇ」

「そう、仮に」

「まあ、どっちかと言えば書きやすいシャーペンかな。書きづらいのは嫌だし」

「そうなんだ」

「うん」

「それでね、ここに芯の出なくなったシャーペンがあります。このシャーペンを使えるようにするには……」

「……もうお小遣い全部使ったのかい？」

「うっ……この季節は学校帰りの肉まんが美味しくて……」

「翔子さーん」

「ああっ、お母さんに言うのはやめてっ。お仕置きが怖いんだからっ」

鍵

向島家のリビングで、まきるは鞄の中身の整理をしている。

「明日は数学と……あと英語と……」

「おい、まきる」

「んー、お母さんなにー？」

「今、鞄から家の鍵が出たぞ。きちんと入れ直しとけよ」

「はーい。……あっ、宿題のプリントもあった」

「ったく、本当に分かってんのかよ」

「よしっ、出来たっ。えーと、鍵は、と……そういえば、鍵って凄いよね」

「唐突になんだよ」

「いやだって、この鍵でしかうちの玄関って開かないんでしょ？世界にひとつだけ、って考えたらなんだか凄いなぁ、って」

「……まあ、言われてみりゃ凄いかもな」

「お母さん」

「あ？」

「お母さんの心のドアを、あたしが開けて見せるよっ」

「馬鹿言って無いでさっさと鞄片付けろ」

「はーい」

鍵再び

翔子は手作りのクッキーを光太郎とまきるの待つテーブルに置いた。

「ほら、夕食前だからあんま食い過ぎるなよ」

「ありがとう、翔子さん」

「ありがとー、お母さん。……うん、美味しいっ！　もぐもぐ」

「おう。あ、光太郎、あたしの車の鍵知らないか？」

「鍵？　ああごめん、さっき車に忘れ物を取りに行ってた。はい」

「ん」

「翔子さん」

「んだよ」

「翔子さんの心の鍵を、私がそっと解いてもいいかい？」

「ば、ばっかおまえはっ！　娘の前でんな冗談言うな！」

「ふふっ、翔子さんはからかいがいがあるなぁ」

「うるせっ」

「もぐもぐ……はー、お腹いっぱいお腹いっぱい。いつもの事だから慣れてますよー」

ファッション誌

翔子がテーブルで雑誌を読んでいると、玄関の開く音がした。

「ただいまっ、今日も寒いよー。部活で疲れたー」

「おう、おかえり」

「あ、珍しい。お母さんがファッション誌なんて読んでる」

「うるせー。あたしだってたまには人の目くらい気にする」

「夏は適当な部屋着のままで出て行くのに？」

「ありゃ夏が暑いのが悪い。冬は着れば良いけど、夏は無理だ」

「もー、一緒に買い物に行く時とか、あたしまで恥ずかしいんだからねっ。タンクトップとか短パンとか」

「分かった分かった、来年からな」

「それ、去年も言ってたよ」

「来年から来年から」

「仕方ないなぁ。……それで、どんな服を買うの？」

「……それなんだよなぁ。とりあえず雑誌を買ってみたはいいものの、どんな服が良いのかさっぱりわかんねえ」

「お母さんスタイル良いし、可愛いんだから何でも着れそうだけど。どれどれ……『三十代女子、冬の欲しいモノ大調査』……ちらっ」

「あたしを見るなよっ」

「買う雑誌、間違えたんじゃない？」

「あたしは今年で四十だぞ？　大体合ってるだろ」

「お母さん、とりあえず鏡を見てこようか」

白い恋人

まきるは何かを食べながら話し出す。

「もぐもぐ……お父さん、白い恋人ってロマンチックな名前だよね」

「もぐもぐ……そうだね」

「もぐもぐ……よーるにむかってゆーきがー」

「もぐもぐ、良い歌だよね」

「ふりーつもーるとー」

「とりあえず歌うのは止めなさい」

「はーい」

ガチャリ

「お、なに美味そうなもの食ってんだ？」

「んー、銘菓ひよこだよー」

「翔子さんも一つどう？　はい」

「サンキュー。お、テレビは桑田特集か……もぐもぐ」

スプーン

夕食の時間。まきるはふと手に持ったスプーンを見た。

「んー……まがれ～」

「曲がるか。馬鹿やってねえで飯食え」

「やっぱり曲がらないかぁ」

「当たり前だ」

「うーん……スプーン曲げの有名な人って誰だったっけ？　ユンケルみたいな」

「あー、そういやそんなやついたな。……何だったっけ、光太郎」

「ユリ・ゲラーかい？　昔だいぶ流行った」

「そう！　それだよっ、ユリ・ゲラー！　超能力のっ」

「でも確かインチキだったんじゃなかったかな、スプーン曲げ」

「えっ」

「なにっ」

「まきるはともかく、翔子さんまで信じてたの？」
「う、うっせーよっ。ってかスプーン曲げくらいあたしだって出来るっ」
「お母さん、超能力使えたのっ！？」
「それは初耳だね」
「はっ、見てろよっ……ふっ」
ビュッ　キャオラッ
「あれ、なんか擬音おかしくない？　翔子さん。というかスプーンがグニャグニャになってるし」
「ほら見ろっ、スプーンが曲がっただろっ」
「……お母さん、それスプーンを物凄い早さで振って曲げたんだよね？」
「うっ」
「……私の妻ながら現実離れしてるよ」
「ていうかこの技マンガで見たことあるよ、あたし」
「ううっ」
「スプーンも完全に駄目になったし、代わりに新しいやつ持ってく

るよ」

「あ、お父さん、ついでにご飯おかわりっ」

「おっ、まきるは良く食べるなぁ。流石私の娘だ！」

「そりゃね、お父さんの娘だもん！　お母さんみたいなアホな行動を取らないように、いっぱい食べてあたし勉強頑張るよ！」

「まきるは凄いな、はははっ」

「うふふふっ」

「あたしが悪かった！　意地張ったのは謝るから、この空気はやめてくれっ」

お茶

ソファに座った光太郎は、熱いお茶を一口飲んで息を吐いた。

「はぁ、良いお茶だ。ありがとう、翔子さん」

「おう」

「お茶、か。……ふふっ、結婚したての頃はろくに家事も出来なかったよね、翔子さん」

「あ？　随分と昔の話だな」

「なんとなくね」

「そりゃ、あの頃は全部が初めてだったからな。家事なんざやったこと無かったから仕方ねえだろ」

「いや、本当に翔子さんは頑張ったよ。今じゃ料理も掃除も完璧だしね。『茶葉って、一缶で一リットルだよな？』なんて訊いてたとは思えない」

「……あれは忘れてくれ」

「まあまあ、思い出の一ページって事で」

「ったく、んなこと言ったら光太郎だって、仕事が上手く行かなかった時に『翔子さん、私は君を幸せに出来る自信がない』なんて泣

きついて来ただろうが」

「おふっ！　……あ、あの時の翔子さんのパンチは痛かったよ。色んな意味で」

「腑抜けたこと言ったからだ」

「ま、まあまあ。それも思い出の一ページ、って事にしよう。うん、もう二十年くらい昔の話だし。ああ、お茶が美味しいなぁ。ずずずっ」

「……二十年、か」

「ずずっ……うん？」

「光太郎」

「なに？　翔子さん」

「皺、増えたな」

「まあね。もう四十だし」

「……」

「翔子さんは変わらないね」

「……そうだな」

「ずずずっ」

「お茶のおかわり、いるか？」

「ああ、頼むよ」

「よいしょっと」

「翔子さん」

「あ？」

「愛してるよ」

「……あたしもだよ。ったく」

料理

向島家の台所。危なっかしい手つきで野菜を切るまきるに、翔子は隣から話しかけた。

「おい、気をつけろよ。指を丸めないと切っちまうぞ」

「分かってるよっ。今集中してるから話しかけないでっ」

「ったく、いきなり『料理を教えて』なんて言うからやらせてみれば、包丁の扱い方からかよ」

「……ふう、やっと切り終わったー」

「指切らなかったか？」

「うん、なんとかっ。次は？」

「次は、って言っても後はフライパンで焼きながら味付けするだけだぞ」

「ふ、フライパン……。あたしには未知の領域だよ……」

「あたしがやるか？」

「……ううん、あたしがやるよっ。こんなところでへこたれないっ」

「いや、それならそれで良いんだけどよ。なんで急に料理なんだ？」
「ん？　んー……何となく、女の子の嗜みかな。料理くらい出来た方がなんか良いじゃない」
「……男か？」
「違う違う。大体あたし、恋人作るつもり無いしね」
「そういやそうだな。我が娘ながら、いらんとこがあたしに似たな」
「お母さんはお父さんがいるんじゃないの？」
「そりゃそうだけどよ、それまではあたしもそんな感じだった」
「あー、そうだね。確かにお父さんがいないと、お母さんはそんな感じだね」
「あたしはちょっと荒れてたしな。でもまきるは恋人の一人や二人作れるだろ。愛想だけは良いし」
「愛想だけ、って酷いよー」
「胸は無いだろ」
「むっ、胸なんて飾りだよっ！　走るとき邪魔だしっ」
「はっ、まあ別に良いけどよ。ほら、油ひけ」
「もうっ。……あ、油ってどのくらい？」

「それなり」

「それなりって投げやりな。……ていっ」

「……ちょっと多いかもな」

「えー。ちゃんと教えてよー」

「やり慣れてくれば分かるから大丈夫だ。ほら、切っといた材料入れろ」

「はーい」

ジュー

「後は適当に焼けるまで待つ。焦がさないように気をつけろよ」

「分かった」

ジュワジュワ

「ん、まあそんな感じだ」

「なんかさ」

「ん？」

「今あたし、物凄い料理してる気がするっ」

「いや、してるからな」

「フライパンで焼きながら箸で混ぜる、って『これぞ料理』みたいな感じしない？」

「あー、慣れすぎてわかんねえ」

「そうかなー。……もう焼けた？」

「もうちょい」

「とりゃー」

ジュワジュワ

「そろそろだな」

「じゃあ火を止めるよ」

「おう。皿な」

「ありがとー。移して、と……」

「味付けはタレでもかけとけ」

「いくよっ、とりゃっ」

「ん、とりあえず完成だな」

「出来たー！　初めての野菜炒め！」

「さて、作ったは良いものの、まだ飯の時間でも無いな。どうする？」

「今から道隆君の所に持ってく！　ふふふっ『女の子らしくない』なんて言った事を後悔させるんだからっ」

「んじゃついでにコレも持ってけ」

「なにこれ？」

「ご飯と昨日作ったクッキー。どうせなら腹一杯食わせてやれ」

「ありがとー！　ラップに包んで、と。よし、じゃあ行ってくるね」

「家が近いからって、走って落とすなよ」

「分かってるよ！　いってきまーすっ」

「おう、いってらっしゃい」

ガチャリ

「……我が娘と幼なじみの道隆、か。春はいつになったら来るのかねぇ」

鍋、鍋、鍋！

十一月も終わる頃、太陽が出ているが空気はとても寒い。
吹く風は冷たく、木々も葉を散らし、枯れた匂いが満ちている。
この街は本格的に冬を迎えようとしていた。

「今日は鍋、と……」

スーパーの野菜売り場で翔子は白菜を手に取り、少し眺めた後でカゴに入れた。
年齢にそぐわない幼い容姿とそれに見合った低い身長。腰まで届く豊かな金髪と相俟って西洋人形のような可愛らしさがある。娘コーディネートの服装もその可愛らしさを引き立てていた。
カゴを持って店内を歩く姿は一見すると親のおつかいに来た少女に見えなくも無いが、迷いのない足取りと商品を見る目の確かさは完全に主婦のそれだった。

まだ買うべき物はたくさんある。
次の食材を買おうと歩き出すと、翔子は見知った姿を見つけた。

「おい、道隆じゃねえか。おまえも買い物か？」

その声に振り向いた男の子、杉村道隆は少しだけ驚いた表情で翔子を見た。

「あれ、翔子さんも買い物ですか？」

杉村道隆。向島家と家族ぐるみの付き合いのある杉村家の一人息

子。厚手のコートに包まれた高校生男子として平均的な身長。容姿も特別に良いと言う訳ではない。だが、どこか人好きのする顔立ちは親譲りの不思議な魅力があり、自然と人が周りに集まってくる。変に大人びた性格が玉に瑕だが。

親同士が全員学生時代からの同級生で、社会に出た後も家が近く、更に子供の歳まで同じという偶然が重なり、翔子にとってはまきる同様自分の息子も同然だ。最近、道隆の両親が仕事の都合で海外に行ってしまったこともあり、翔子は殊更に道隆の事を気にかけていた。

「見りゃ判るだろ」

「まあ確かに」

苦笑混じりに返す道隆に、翔子は当然のように言う。

「これから飯だろ？　どうせならウチで食ってけ」

「え、良いんですか？　いつもご馳走になってばかりで申し訳ないんですけど……」

「んなこた子供が心配することじゃねえよ。ほら、そうと決まったらカゴ持ちな。今日の飯代の代わりだ」

翔子はカゴを道隆に差し出す。

「……喜んでお供します」

道隆がカゴを受け取ったのを確認して翔子は歩き出す。

「んじゃ肉コーナーに行くぞ」

「了解です。今日は何を作るんですか？」

二人で歩く姿は兄と妹が仲良く買い物をしているように見える。だが、実際は色々と真逆だ。

少し遅れてついて来る道隆に翔子は言う。

「寒い日とかけて野菜たっぷりととく。そのこころは？」

「……鍋、ですか？」

翔子は振り向き、腰に手を当て不敵に笑った。

「おう、鍋だ。美味いもん食わせてやるから、期待しとけよ？」

道隆は立ち止まって笑う。

「翔子さんの料理が美味しくない訳ないですよ。あ、そうそう、昨日何故かまきるが野菜炒めを持ってきたんですけど……」

ちょっと油っぽくて、と道隆は話しながら歩き出す。翔子も笑いながら隣を歩く。

さっさとこいつとまきるがくっつけば、あたしも安心なんだけど。

翔子はそんな事を思いながら買い物を続けた。

向島家は立派な一軒家だ。光太郎の頑張りもあり、ローンはもう払い終えている。
そんな向島家の玄関を開け、翔子と道隆はリビングへと向かう。
「お母さんおかえりー、って道隆君？」
少しだらしない格好でソファに寝そべっていたまきるは、上半身だけ起こした状態で声を上げた。
黒く滑らかな髪は肩に届くか届かないかくらいで、翔子譲りの整った顔立ちは愛嬌がある。結局部屋着にした冬用の体操服は中学校のものだが、直に見えなくても陸上で磨かれた脚線美は隠せない。
その外見と明るい性格で学校での人気の高いまきるの無防備な姿を見ても、道隆は気にせずに買い物袋を翔子に渡して、その隣の一人掛けのソファに座った。
「いつも通り、今日は晩御飯をご馳走になるようになった」
「ああ、またお母さんに強引に連れて来られたんだ」
「そうとも言う」
今日は鍋だよー、と気の抜けた声を出しながらまきるはまた寝そべる。警戒心の欠片もない姿勢。きっとこの姿を学校の男子が見れば、人生を賭けて突貫してしまうだろう。
洗面所の扉が開く。

「あれ、道隆君じゃないか。今日はウチで晩御飯かい？」

風呂から上がった光太郎は、冷蔵庫から牛乳を取り出しながら言った。

濡れた髪が頬に張り付き、どこか色気の漂う立ち姿。もう何年も焼けていない青白い肌も今は血色が良い。おじさん、と呼ばれる歳だが決してその呼び方は悪い意味ではなく、良い意味で『おじさん』と言える雰囲気を纏っていた。

おじゃましてます、と道隆は頭を下げた。

光太郎は牛乳を入れたコップを片手にテーブルに着く。

「もう聞いたかい？　今夜は鍋だよ」

「はい、聞きました。いつもながらすみません」

「ははっ、『鍋は美味しく楽しく大勢で』が向島家の家訓だからね。むしろ来てくれなきゃ困る」

「そんな家訓あったんですか？」

道隆の言葉に光太郎は茶目っ気のある笑みを向けた。

「今決めた」

「……そんなとこだろうと思ってましたけど」

二人の話し声でまどろみから覚めたまきるは起き上がって伸びをする。

「ん〜〜〜っ、ふぅ。おなか空いたー」

光太郎がそんなまきるを見て優しく目を細める。

「まきる、道隆君が来てるよ」

「うん、知ってるよー」

「リベンジしなくて良いのかい？　この前ゲームで負けてなにやらって言ってたじゃないか」

「あっ、そうだった！　道隆君、ご飯出来るまであたしの部屋でゲームしようよっ！　今日は負けないからねっ」

「ふっ、また僕に負けたいのか……って、まきるっ。引っ張るなよっ」

まきるに手を引っ張られ、半ば強引に道隆はリビングから退去させられる。

そんな娘とその幼なじみが二階に上がる足音を聞きながら、光太郎は残りの牛乳を飲み干した。

「おいまきる、ちょっと手伝うか……っていねえのかよ」

手を拭きながらリビングに来た翔子に光太郎は言う。

「道隆君と自分の部屋に行ったよ」

「ったく。料理の勉強したい、なんて言ってから手伝わせるついで

に教えようと思ったのに」

「まあまあ、若い二人の邪魔をしちゃいけないよ」

冗談混じりに光太郎は話す。

出来れば本当になれば良いな、と思いながら。

二人が同じ年に生まれる、と知った時、光太郎はその偶然に驚きと共に柄にもなく運命を感じた。道隆の父親である自分の親友も同じシンパシーを感じたらしく、互いに何も言わずとも行動は始まった。

赤ん坊の頃から一緒に遊ばせ、ことあるごとにペアルックを着せ、大人になった時に『わっ、こんな写真恥ずかしいっ。きゃっ』なんて言わせるつもりだった。自分の親友も『これで幼なじみとしての地位は確定だ。もう後は結婚するだけじゃね？』とか言っていた。親友の妻は幼なじみだし、自分もこれで孫の心配はしなくて良いかな、なんて思っていた。

結果として仲良くなりすぎた二人は、逆に近すぎて互いに意識しない存在になっている。

嬉しいような悲しいような、そんな複雑な気持ちを感じながら光太郎は目の前のノートパソコンを開く。翔子が向かいの椅子に座り頬杖をついた。

「また仕事か？」

「うん、そうだよ。料理は良いのかい？」

「はっ、あたしが失敗すると思うか？」

「いや、まったく」

翔子の自信たっぷりな言葉に光太郎は全幅の信頼で返す。

そしてそんな愛しい妻の横顔を見て、あれもまた愛の形かな、と思い直して光太郎は文章を打ち込み始めた。

――出来たぞ、降りてこーい！

「はーいっ！」

階下から聞こえてきた翔子の声に、まきるは手元のコントローラーを操りながら応える。

画面の中でトラのマスクを被った筋骨隆々の男が、外国人の女性にプロレス技をかけた。

Ｋｉｎｇ　Ｗｉｎ！

「やったっ、リベンジ成功っ」

「くっ、……最後の最後で投げ技かっ……」

悔しがる道隆とは対照的に、まきるは嬉しそうにゲーム機の電源を切った。

「ふふふっ、もう道隆君なんて恐れずに足らずだよっ」

「っ！　まきる、その言葉忘れるなよっ」

まるで三下の捨て台詞のような道隆の言葉。まきるは勝利の余韻と共に立ち上がる。

「へへーっ、リベンジはいつでも受けて立つよ。でも今日は夕ご飯が出来たみたいだし、また今度ねっ」

「最後に投げ抜けさえ出来てれば……」

ぶつぶつ呟きながら道隆はまきるの部屋を出る。

まきるは蛍光灯のスイッチを消そうとしてドアの近くに移動した。

ふと、自分の部屋を見渡す。

掃除が行き届き、綺麗に整頓された部屋にはあまり女の子らしさは無い。友達の女の子の部屋はピンクやフリルの主張する、女の子らしい可愛さに溢れた部屋だった。

陸上一辺倒な自分の部屋はどちらかというと男っぽい。申し訳程度にぬいぐるみがあるが、ストレッチの器具やテーピングの本がそれを上回ってこの場を支配している。本棚の漫画も少年向けの本がほとんどだ。

もう少し女の子らしくした方が良いかなぁ、とまきるが思っていると、先に出ていた道隆が話しかけてきた。

「まきる、何やってんだ？　早く行くぞ」

「うん」

「あ、そうそう」

道隆はドアの隙間から本棚を指差す。

「あの漫画な、本誌であの御方が復活したらしいぞ」

「えっ、あ、あの御方ってまさか……」

「もちろんあの御方はあの御方だ。先に降りとくぞ」

「あっ、待ってよー。その微妙な隠し方は卑怯だよっ」

まきるは蛍光灯を消し、先に階段を降りる道隆を追う。

さっきふと考えた事はもう消えてしまった。

「「いただきます」」

向島家ともう一人は鍋を食べ始める。

翔子が注ぎ、まきるが食べ、光太郎は微笑む。

道隆は手元にある野菜たっぷりの小分けされた鍋を食べた。美味い。

翔子が自分のご飯をつつきながら言う。

「道隆、美味いか？」

「ええ、いつも通り美味しいです」

「おう。じゃあ、しっかり食え」

はい、と道隆はまた食べる。やっぱり美味しい。こんなに美味しいのは、最高の調味料を贅沢に使っているからだろう。

「あ、お母さん、醤油とって」

「ほら」

「ありがとー」

まきるが受け取った醤油を自分の鍋に入れる。

「あっ、入れすぎたっ」

「まきる、私のと替えるかい？」

「んー……、いや、大丈夫っ。お父さんも歳だから、摂生しなきゃ駄目だよ？」

「おふっ」

食べ物が変な所に入った光太郎がむせる。それを見て、呆れの入り混じった笑みを浮かべながら飲み物を渡す翔子。

そんな向島家を見て、道隆は自分の両親に思いを馳せる。

「ほら、道隆。はやく食わないと無くなっちまうぞ」

「そうだよ。まきるが全部食べてしまうよ。……私はもう歳だからあんまり食べないけどね……はぁ」

「お、お父さんっ。さっきのはそういう意味じゃ無いってばっ。み、道隆君も何かフォローしてっ」

が、目の前の騒がしい光景に現実に引き戻された。

家族の関係は血の繋がり。

紛れもない家族に混じって道隆は鍋を食べている。

笑顔の絶えない食卓。みんなで食べる食事。

――どこからどう見ても家族に見える四人が囲むのは、熱く美味しい鍋なのだ。

「美味い」

誰ともなく呟いてまた箸を伸ばす。

今日の晩ご飯は、鍋！

鍋、鍋、鍋！

了

12月

向島家のリビング。椅子に座る光太郎は足下から伝わる寒さに身を震わせた。

「さ、寒い」

「ほら、膝掛け」

「ありがとう、翔子さん」

「しっかし、最近めっきり寒くなったな」

「そうだね。今年ももう十二月だしね。歳をとると時間が早くて早くて」

「そういや十二月か。最近街が明るい、とか思ったらクリスマスだったか」

「いつも思うけど、ああいうイルミネーションとか早過ぎる気がするよ」

「まあ、そうだな。まだ一カ月近くあるし」

「ああ、でも一カ月なんてあっという間だしなぁ。……締め切りが早い……！」

「まあ、ほどほどにな」

「……翔子さん」

「あ？」

「……クリスマスプレゼントは何が良い？」

「クリスマスプレゼント？　別に良いよ今更」

「いやいや、駄目だよ。私の気持ち的に」

「……そうだな」

「うん」

「おまえが今年一杯健康でいること」

「え」

「そこまで欲しい物も無いし、家族全員で年が越せれば良いや。最近おまえは仕事し過ぎだしな。……いかん、あたしまでおばさん臭い事を言うようになっちまった」

「し、翔子さんっ」

「ん？」

「私っ、仕事頑張って早く終わらせて、とびっきりのプレゼント買うよ！」

「え、いや別に」

「よし、死ぬ気で頑張るぞ！　今日から徹夜だっ。ふはははっ」

「いや、だからあんまり頑張るなって」

耳かき

二階の自室から降りてきたまきるはリビングへの扉を開けた。

「お母さーん」

「あ？　なんだよ」

「耳かきしてー」

「今洗濯物畳んでるからちょっと待っとけ」

「はーい」

「……よいしょ、と」

「終わった？」

「ああ。耳かき持ってこっちこい」

「耳かき耳かき、と。ふふー、とりゃ」

「うおっ。勢いつけて頭を乗せるなよ」

「ごめんごめん。宜しくお願いしまーす」

「はいはい。ほら、あっち向け」

「はーい」
「ったく、耳かきくらい自分で出来るようになれよ……よっ、と」
「うふふー」
「どした急に笑って」
「いや、気持ちよくてつい声が」
「そんなもんかね……ほいっ、と」
「そんなものだよー。……くふふっ」
「……よし、終わりだ。次、こっち向け」
「はーい。……お母さんってさ」
「んー？」
「甘い匂いするよね」
「そうか？」
「うん、するよー。何だか安心するー」
「分かったから、もうちょい腹から離れろ。やりづらい」

「はーい」

「……よいしょ、と。よしっ、終わり」

「ありがとー。うりうり」

「やめろっ。くすぐったいっての」

「えー、何か気持ちいいもん」

「ったく、いつまでもあたしが耳かき出来る訳じゃねえぞ」

「うん、だからもうちょっとだけー」

「仕方ねえな。手のかかる娘だ」

「ふふふー。お母さん大好きっ」

「……ぐりぐりするな」

「翔子さん翔子さん」

「あ？　どうした光太郎」

「次、私も良いかな」

「おまえ、さっき自分でやって無かったか？」

「やってたけどやってない」

「無駄な嘘をつくな」

「だってだってっ！　うらやましいじゃないかっ。翔子さん洗濯物畳んでるしなぁ、と思って遠慮した私を差し置いてまきると……まきるだけと……っ！」

「あほかおまえは。……まあ、まきるが退いたらやってやらんこともない」

「っ！　……まきる、そこを退きなさい。これはお父さんの命令だ。繰り返す、これはお父さんの命令だ」

「えー、やだよー。久しぶりにこのふにふにのお腹を堪能してるんだからっ。うりうり」

「っ、くすぐったいって」

「……お小遣いあげるよー」

「お金じゃ買えない価値がある。きっとその一つがこのふにふに」

「……ふっ、どうやら私に本気を出させたいようだね、まきるは。よろしい、くらえっ。お父さんマッスルファイナルスペシャルアイラブショウコアタァァ———」

ピピピ　ピピピ　ピピピ

「あっ、そういや鍋に火をかけてたんだった。またいつかな」

「あっ、翔子さん……」

「……お、お父さん？」

「……――覚悟は、出来たね？」

「ほ、ほらっ、お金で買えないものがあるっ！　それは娘への寛大な愛情……」

「愛って、残酷だよ」

「あっ、あたし宿題が――」

「くらえっ、お父さんブロークンマイハートショウコマジラブソニックアタックッ！！【偉大な父の愛の鞭】」

「何その名前っ！　いやぁぁぁあああっ！」

バァ――――――――――――――――ンッ！！

パズル

ソファに座ったまきるはあくびをした。

「ふぅ、暇だなぁ」

ガチャリ

「ただいま」

「あ、お父さんおかえりー」

「ふう、疲れた」

「仕事関係？」

「うん。ちょっと打ち合わせ」

「そうなんだ」

「あ、そうそう」

「んー？」

「担当の人からこんなの貰ったよ」

「なになに？」

「パズル」

「はいはいっ、やりたーい！」

「ははっ、はいどうぞ」

「やったっ。包装紙を剥がして、と」

「お、絵は魔女の宅急便だね。翔子さんが喜びそうだ」

「お母さんこれ好きだしね。よしっ、頑張ろっ」

一時間後

「で、出来たっ……長く苦しい戦いだったよ……」

「おっ、出来たかい？　それじゃ早速糊付けして飾ろうか」

「うんっ」

「糊を塗って……」

ガチャリ

「ただいま」

「あ、お母さんおかえりー」

「翔子さんおかえり。これ、見てみなよ」

「おお、パズルとか珍しいな。んじゃ、あたしは今から飯を作るから」

「あれ、お母さん行っちゃった。もうちょっと反応するかと思ったのに」

「大丈夫大丈夫。夜になれば分かるよ」

「？」

その日の夜。普段なら向島家が寝静まる頃。

「はぁ、ジジ可愛いなぁ。うちも黒猫飼うか……それにしても可愛いなぁ」

「ほらね、伊達に何十年も夫婦やってないよ」

「夜になって隠れて見にくるお母さん……萌え」

膝掛け

ソファに座ったまきるは隣の光太郎に話しかけた。

「寒いね、お父さん」

「そうだね、もうすっかり冬だよ」

「雪は降るかなぁ」

「どうだろうね。一応週末には降るみたいだけど」

「週末かぁ。クリスマスも近くなったし、今年はホワイトクリスマスが良いなぁ」

「そうだね。……ううっ、寒さが足にくるなぁ……」

「おい、まきる。これ膝にかけとけ」

「あっ、お母さんありがとー」

「……翔子さん、私には？」

「それが最後の一枚だ。まだ若いんだしふんばれ」

「ふんばれって、翔子さん……。まきる、ちょっと端っこに私も入れてくれないかい？」

「入れてあげたいのは山々だけど、これ一人用だから入らないよー」

「あたしだって寒いんだ。娘のために我慢しな」

「ううっ、なんて扱い……そうだっ！」

「あ？　どした？」

「翔子さんが私の膝に座れば良いんだっ。そうすれば翔子さんも暖まり、私も暖まる。心まで暖まる夫婦の……。って、二人とも。その目は止めてくれないかい？　下心とか無いから、いやホント」

ヘアゴム

翔子は洗濯物を畳む途中で、凝った肩を回した。

「……はぁ。何か今日はだるいな」

「お母さん、大丈夫？」

「んー、大丈夫だ。けど、肩がやたら凝ってめんどい……。歳かなぁ」

「……乳」

「ん？　なんか言ったか、まきる」

「い、いや、何でもないよっ」

「？　まあ無いならいいけど」

「あっ、そうだっ。あたしが肩もみしようか？」

「あ？　急になんだよ」

「たまには良いじゃない。あたしだって、肩もみくらいなら出来るし」

「……そうだな。んじゃ、頼む」

「うん！　……よいしょ、っと。はい、むこう向いて座って」
「ん」
「それじゃいくよっ。……もみもみ」
「お、上手いもんだな」
「ふふっ、陸上でマッサージとかは良くやるからねっ」
「あー、極楽極楽」
「……お母さん、髪の毛結んで良い？　ちょっとやりにくいかも」
「ん？　別に良いぞ。ヘアゴムは、と……あったあった。ほら」
「ありがとー」
「……そろそろ切りに行こうかな」
「えっ、切るの？　こんなに綺麗なのに」
「光太郎が伸ばせ伸ばせうるさいから伸ばしてるけど、結構邪魔だぞ？　これ」
「えー、あたしも切って欲しく無いよー」
「……まあ、あたしは良いけどな。どっちでも」

「じゃあこのままで決定！　……よし、出来たっ」

「首がスースーする」

「これでやりやす……く……」

「どした、まきる？」

「……うなじって、良いよね」

「おやじかおまえは」

「だってだって！　普段見えなかった部分が見える、って良くない？　それに、うなじを見せる、って相手を信頼してる証だよ？　ズキュンと来るよっ」

「分かったから早く続き」

「伝わんないかなぁ、この感じ。……もみもみ……もみっ」

「変なこと揉むなっ」

暖房

光太郎と玄関先で偶然合流したまきるは、冷たい手を擦り合わせながらリビングのドアを開けた。

「さ、ささ寒いよっ。ただいまっ。リビングさむっ」

「ただいま。って、翔子さんはいないみたいだね。出掛けてるのかな？」

「どどど通りで寒いと思ったよっ」

「大丈夫かい？」

「だ、大丈夫じゃないかもっ。だっ暖房をっ」

「まきるは制服だからスカートだしね。見てるこっちも寒くなってくるよ」

「ス、スイッチオンッ！　布が無ければ暖房を入れれば良いじゃない！　ｂｙマキル・アントワネット」

「お、良く知ってるね」

「このくらいはねっ」

「まあ、とりあえず着替えたら？」

「うんっ」

ガチャリ　バタバタ

「あんなに急いで上がって……。よっぽど寒かったのかな」

バタバタ　ガチャリ

「ただいまっ」

「早いね」

「あたしの部屋も寒くて、パーッと脱いでパーッと着てきたっ。ううっ、服が冷たいよ」

「すぐに暖かくなるから我慢しなさい。お、温風が出てきた」

「う〜〜〜っ。……暖房の最初の匂い、あたし好きかも」

「そう？　私はあんまり好きじゃないかも」

「えー、良い匂いだよー。特に今は幸せを運んでくれるしっ」

「ん、確かに暖まってきたね」

「はー、本当に寒かった。冬だ冬だ言ってたけど、いよいよ本気出してきた、って感じだね」

「そろそろ雪も降るらしいしね」

「いいよねー。雪合戦したいなー。寒いけど」

「そういえばさ」

「んー？」

「高校じゃスカートの下に何か履いたらダメなのかい？」

「ううん、黒いタイツなら大丈夫だよ。鞄の中に入ってるやつ」

「じゃ、どうして履かないんだい？」

「……履いたら負けかな、って思ったの」

「負け？　見た目が嫌いとか？」

「ううん」

「じゃあ何に？」

「寒さに、かな」

「へー」

「学校に着いた時、あたしの脚はもう限界だった。タイツを履いて来なかった事を後悔して、鞄の中のタイツをトイレにでも行って履いてこよう思った。でも、あたしはふと考えたの。ここでタイツを履いたら周りから『あの子途中からタイツ履いてる。きっと寒さに負けたんだね』っていう憐れみの視線で見られるって」

「そうなんだ」

「だからあたしはお弁当にかけて誓ったのっ！　今日はタイツを履かないって！　向島家の名に恥じない、立派な生足ガールになるって！」

「そりゃ凄いね。あ、テレビつけて良いかな？」

「もー、実の娘にその反応は酷いよー。もうちょっと乗っかってよー」

寝不足

目が覚めた翔子は顔を洗ってリビングに入った。

「今日も寒いな……。暖房暖房……あれ？　昨日つけっぱだったっけな」

「おはよう、翔子さん」

「なんだ、光太郎かよ。今日は随分と早いな」

「うん。早いと言うか遅いと言うか」

「あ？」

「まあ、早い話が昨日の夜からえらく筆が進んで、そのまま一直線と言うか」

「……おい。まさか寝てねえのか？」

「はっはっはっ。お陰で一段落着きそうだよ」

「はあ。この前無理すんなって言ったばっかだろうが」

「まあまあ。私もまだまだ若いよ」

「ったく。飯はどうする？」

「そうだね、軽めなのをお願いするよ」
「分かった。そのままソファで待っとけ」
「ありがとう、翔子さん」
ガチャリ
「……おはよー」
「……おい、まきる。もしかしておまえまで寝てねえのか？」
「んー。昨日は何だかゲームの止め時が無くてー」
「ったく、揃いも揃って馬鹿やろう共が。飯作るから待ってろ」
「んー、眠いよー。お父さんちょっとよけてー」
「……ん」
「ありがとー。あー、リビングは暖かいなぁ……」
「……翔子さん……グーは勘弁して……」
「……押し寄せてくる……うまくちしょうゆ……」
「おい、出来たぞ……って、寝てんのかよ」
「……せめて……寝技で……うう……ごめんやっ

ぱり死ぬ……」

「……刺身とわさびが……旅人……」

「おまえら風邪ひくぞ。……ったく、仕方ねえ。毛布持ってくるか」

「……あ……れ……？　……これが……涅槃……」

「……でも……嫌いじゃない……ふふっ」

男はつらいよ

ベッドで寝込む光太郎。その枕元に飲み物を置いて、翔子はそっと光太郎に近付いた。

「光太郎……」

「翔子さん……」

「馬鹿かおまえは」

「けほっ」

「馬鹿かおまえは馬鹿やろうか。結局無理して風邪ひきやがって」

「……面目ない」

「そりゃまだ四十って言ってもそんなに年食ってる訳じゃねえけどよ、それにしたってもう少し自分の事を考えろよっ」

「……申し訳ない」

「大体、そんなに急がなくても年内には十分終わるんだろ？　別にそれで良いじゃねえかっ」

「……いや、クリスマスは一緒に祝いたくて」

「あーあー、そんな所だと思ったぜ。よし、クリスマスまでじっくり寝とけ」

「……けほっ」

「……ったく、粥作って来るから寝てろ！」

バタン！

「……よっと。クリスマスはいつだって特別な日。なら私も特別頑張らなくちゃ。さて、さくさく仕事を終わらせますか。けほっ」

涙が出るほどクリスマス！～男達の戦い～

クリスマスに訪れる聖なる夜。だが大抵の日本人がそうであるように、向島光太郎にキリストの誕生を祝う気はさらさら無い。

部屋に飾れる程度の小さなクリスマスツリー。ちょっとだけ奮発したシャンパン。気のせいかいつもより明るい照明。

時間は日も落ちた頃。光太郎は意気揚々と今夜のクリスマスパーティーの準備をしていた。

「ふう、大体こんなものかな」

光太郎は台拭きを置いて部屋を見渡した。

妻である翔子は台所の料理で忙しい。娘のまきるは幼なじみの杉村道隆を呼びに行っている。

つまり、この場には自分しかいない。

光太郎は隠れるように寝室に移動し、押し入れの奥をゴソゴソと探った。

どうにか仕事を前倒しして時間を取ったんだ。やっぱりこれくらいのサプライズはないと。

そんな事を思っている光太郎の目の前には翔子、まきる、道隆の三人分のプレゼント。

そしてもう一つ、光太郎は押し入れから一本の酒を取り出した。

芋焼酎、黒霧島。長く太い立ち姿はもはや貫禄すらある。

あんまりお酒は飲まないけど、今日くらいは良いだろう。

仕事は終わった。料理は美味くない筈がない。そしてトドメに旨い酒。光太郎は緩む口元を自覚する。

――光太郎、これ持って行ってくれ！

台所から聞こえる翔子の声。急いでプレゼントをしまう。

翔子さんと呑むのはいつぶりだろうか、と期待に胸を膨らませて、光太郎はリビングに戻っていった。

酒とは魔性の飲み物だ。人を高揚させて、何時もより大胆にさせる。

そして人は、欲望には勝てないのだ。

光太郎、翔子、まきる、道隆。全員揃って準備は万端。未成年もいるが、度数のとても低いシャンパンなら万が一の事も無いだろう。

テーブルには翔子が腕によりをかけた料理の数々。彼女なりにクリスマスを意識してか、洋食寄りの品揃えだ。

そんなに気取ったパーティーでは無いが、誰とも無くグラスを持った。

「「かんぱーい」」

全員がグラスを掲げた。

アルコールが入っている、と聞いていたので、少し用心しながら道隆は口をつける。

「……お、おじさん。これ、かなりおいしいです」

「ははっ、値段が張るだけあったみたいだね」

舌で踊る繊細な刺激と豊かな風味。アルコールは殆ど感じない。道隆は料理に箸を伸ばす。

いつも通りの、いやいつも以上の美味しさ。高級料亭なんて目じゃない。

幸せに味があるならきっとこんな味だ、と道隆は思いながら飲み込んだ。

「いや、本当に今日はありがとう御座います。何か物凄い幸せです」

目一杯頬張った分を飲み込んで、まきるは隣の道隆に、にぱっと笑いかけた。

「寂しい独りのクリスマスになるところだったもんねー。あたしに感謝してよ？」

「本当にありがとうございます。おじさん、翔子さん」

「……ていっ」

「いてっ！　……わき腹は卑怯だろっ」

じゃれあう二人に翔子と光太郎は自然と笑顔になる。

――きっと楽しい夜になる。みんなが笑顔なのだから。

誰もが、そう信じて疑わなかった。

料理もあらかた食べ尽くし、場の空気も自然と緩やかなものになる。

光太郎は寝室からプレゼントを持ってきた。

「はい、じゃあクリスマスプレゼントだよ。流石にサンタの格好はしてないけど」

やったー、と無邪気に喜ぶまきる。良いんですか、と恐縮気味の道隆。

光太郎は二人に手のひらよりちょっと大きい箱を渡した。

「はい。こっちがまきるで、こっちが道隆君」

「お父さんありがとー！」

「すみません。ありがとうございます」

まきるはその箱を上下させたり、横に振ったりする。

「んー？　何だろ。軽い……。お父さん、開けてみて良い？」

「ダメ」

「えー？　どうして？」

「どうしても。それは寝る前に開けなさい。道隆君もね」

んー、と首を捻るまきる。道隆は頷いた。

光太郎は最後に酒、黒霧島を出した。

「翔子さんにはこれ」

「おっ、珍しいな。酒なんてよ」

「たまにはこういうのも良いかな、と思ってさ」

グラスを出すか、と席を立つ翔子の楽しそうな横顔を見て、光太郎はイケる事を確信した。

一旦ここで喜ばせて酔わせ、後で二人きりになった時、さっきの本命のプレゼントを渡す。二段構えの戦法。決まればもう自分の勝ちだ。後はそのままイチャイチャラブラブしてやる。

自分の見事な策略に若干酔いながら、光太郎は表面上は優しく笑った。

男は狼。そして今日はクリスマス。このために風邪をひいてまで仕事を頑張った、と言っても過言ではない。

（翔子さんはガードが堅いし、こういう日に攻めなくてどうする！）

ふふふふふ、と光太郎は怪しい笑い声を上げた。

「おじさん？」

道隆の声にふと我に帰って、光太郎は紳士の笑みを浮かべた。

「何でもないよ」

「はあ」

「あ、そうそう。道隆君」

「はい？」

光太郎は二人にあげたプレゼントの中身を思い浮かべながら、まきるに見えないように親指を立てる。

良く分かっていない様子の道隆を見て、光太郎は思う。

――もう、慨成事実作っちゃえ。

今夜の向島光太郎は、とてつもなくハイになっていた。

翔子が氷を入れたロックグラスを二つ持ってくる。

「光太郎、水はいるか？」

「いや、ロックで」

「お、いくな」

笑いながら黒霧島を注ぐ上機嫌な翔子。光太郎は注ぎ終わったグラスを軽く掲げた。

「君の瞳に、乾杯」

「はっ、キザだな」

ぐいっ、と男前に呑む翔子を横目に見ながら、光太郎は一口呑む。翔子は酒に強い。同じペースで呑めば先に自分が潰れてしまう。

鼻に抜ける焼酎の香り。臓腑に染み渡る感覚。久し振りのアルコールはまだ疲れの残る体を癒やしてくれる気がする。

ソファで仲良くテレビを見るまきると道隆。

光太郎は立ち上がって、翔子の隣の椅子に座り直した。

翔子は二杯目を注ぎながら言う。

「なんだよ？」

「いや、別に」

すぐ隣から空気を伝って体温を感じる。

なんだか無性に抱き寄せたい気持ちをねじ伏せ、もう一口酒を呑む。

「なんかつまみでも作るか？」

翔子はテーブルに頬杖をつきながら光太郎を見る。

「そうだね。お願いします」

わかった、と言って台所へ向かう翔子。

言葉遣いとは真逆で、いつも翔子は甲斐甲斐しく世話をしてくれる。

その心遣いが嬉しくて、でもそのために離れた距離がもどかしくて、光太郎はもう一口ちびりと呑んだ。

向島まきるは好奇心旺盛だ。やったことの無い事はやってみたいし、飲んだことの無い飲み物は飲んでみたい。

母親がつまみを作って戻って来てから、一層仲睦まじく話す両親。付き合い始めのカップルのような桃色の空間を創っているが、それはいつものことなので気にしない。

さっきからテレビの合間についつい見てしまうのは、どしりとテーブル中央に鎮座するお酒。

達筆な『黒霧島』という文字。黒く光を返すボディ。

そのお酒を呑んでから、父親も母親も更に上機嫌になっている。

つまり、あれは良いものだ。

きちんとしたお酒を呑んだ事が無いが、さっきのシャンパンは何も無かった。多分、変な事にはならないだろう。

まきるは光太郎に話しかける。

「お父さん、あたしもそれ飲んでみて良い？」

珍しく赤みを帯びた頬を弛ませ、光太郎は言った。

「うーん。……まきるも高校生だし、一口だけなら良いよ」

差し出される飲みかけのグラス。

まきるは躊躇なく受け取り、くいっと口に含んだ。

「ぶはっ。けほっ……けほっ……ま、不味い……」

「ははっ、まきるにはまだ早いかな」

慣れない苦味と刺激に思わず噴き出してしまった。

近くのティッシュで汚したテーブルを拭き取り、ソファに戻る。

その様子を見ていた道隆が心配そうな瞳を向けてきた。

「まきる、大丈夫か？」

「大丈夫だよ」

まだ口の中に残る僅かな苦味に、まきるは顔をしかめる。

「あんなに不味い物だったなんて、思ってなかっただけ」

どうして大人はあんなものを美味しそうに飲めるのか。

そう思いながらまきるが両親を見ると、二人の周りの空間はもう出来上がっていた。何がとは言わないが。

テーブルの黒霧島に視線を向ける道隆。いつにも増してラブラブな両親に気恥ずかしさを感じて、まきるは立ち上がった。

「道隆君、あたしの部屋でゲームでもしようよ」

「ん？　ああ、そうだな」

道隆も立ち上がる。

二人してリビングから出ようとすると、光太郎が呼び止めた。

「二人とも、もう寝るのかい？」

「ううん、ゲームしに行くだけ。あ、でも、もしかしたらそのまま寝るかも」

「そっか。じゃあ道隆君、今日はまきるの部屋で寝てもらって良いかな？」

突然の光太郎の提案に、道隆は頷きながら返した。

「えっと、僕は構わないんですけど、大丈夫ですか？　色々」

道隆が最後にまきるの部屋に泊まったのは、中学生の中頃。今でも互いにそこまで気にしないが、高校生だと親は心配するはずだ。

光太郎は手を軽く横に振る。

「大丈夫だよ。私と翔子さんはこのまま飲み続けるから、いつもみたいにリビングに寝て貰う訳にもいかないしね」

そういう事ですか、と納得して道隆はまきると一緒に二階に上がった。幼なじみ同士、別に意識するような事も無いだろう、と楽観しながら。

さて、クリスマスの夜は長い。

恋人達にクリスマスの何が本番か、と問われれば、きっとこう答えるはず。

『アレ』

アレが何か、とは詳しくは言わない。でも、きっと伝わっているはず。

青少年健全育成うんたらとか、ここより先は大人の世界とか、つまりそういう類だ。分かるよね？

ここからの物語は男の物語。悲しくも力強く生きる、男の性（SAGA）なのだ。

涙が出るほどクリスマス！～男達の戦い～（後書き）

次に続きます！

涙が出るほどクリスマス！　杉村道隆編（前書き）

微エロ、下ネタ注意です！

涙が出るほどクリスマス！　杉村道隆編

まきるの部屋でゲームをする事、数時間。楽しいクリスマスの日も終わろうとしていた。

「はっ、まだまだだな。まきる」

僕、杉村道隆の目の前にあるテレビは、勝者を鮮やかに映し出している。

隣で敗者となったまきるは、悔しげなため息と共にゲーム機の電源を落とした。

「……最後のフェイントさえ見切ってればっ」

「負け惜しみ」

「うぐっ」

クリスマスに負けたー、と言いながらまきるはコントローラーを片付ける。

静寂が訪れて自覚する眠気。僕は欠伸をかみ殺した。

「そろそろ寝るか？」

「うーん」

逡巡は一瞬。まきるは頷いた。

「そうだね。あたしもちょっと眠いかもっ」

まきるは立ち上がり、押入を開けた。

この部屋はまきるの部屋だ。当然ベッドは一つ。だけど、今まきるが探っている押入には、予備の布団がある事を僕は知っている。

手元のクッションを潰したりして布団が出てくるのを待っていると、まきるが間抜けな声を上げた。

「あれー？　いつもなら布団があるんだけどなー」

ガチャリ、と押入を閉め、まきるはドアへ移動しながら言う。

「ちょっとお母さんに訊いてくるねー」

「分かった」

ドアが閉まる音と、階段を降りる音。

やることが無いので、まきるの部屋を見渡す。

テーピングやストレッチに関する本。青を基調にしたカーテン。少年漫画の詰まった本棚。実用的な、そんな見慣れた風景。

クッションを敷いて寝転がる。多分、翔子さんがいつもきっちり掃除をしているであろうカーペットは綺麗なものだ。

ふとベッドの下を見ると、転がり落ちてしまったのか無造作に置かれた本。僕は何気なく手を伸ばして取り、開いてみた。

閉じて表紙を見て、もう一度開いた。

そこには裸で組み合う男女の絵。どこからどう見てもチョメチョメしている。チョメチョメ以外の何物でも無い。わー少女漫画ってただのエ――

「待て待て待て待て。落ち着くんだ、僕」

幼なじみの知ってはいけない秘密を知ってしまった罪悪感。というかこれ結構ハードだな。

天真爛漫な幼なじみもやっぱりこういう事に興味があるのだろうか。想像出来ない。

背徳感を感じながらページを捲ると、正に『愛し合ってます。キャッ』な見開き。これ十八禁じゃないの？

そういえばどこかで聞いた事がある。クリスマスの夜の六時間は、一年で最もウフンアハンな六時間だ、と。

もしこの少女漫画みたいな事をまきるがするとして、相手は――

「道隆君？」

「うおあっ、どうしたんだ！？　まきるっ」

「えっ？　ど、どうしたの？　そんなに驚いてっ」

飛び跳ねる心臓。後ろから急に聞こえた声に、僕は華麗に少女漫画を後ろに隠し、平静そのもので応えた。はずだ。

視線を泳がせ、何故かそわそわしているまきる。

未だ落ち着かない自分の心音を聞きながら、僕は言う。

「いや、どうもしてないぞ？　うん、ええと。そう！　布団は結局どうなったんだ？」

酒も呑んで無いのに赤い頬を指で掻き、まきるは戸惑いながら話し出した。

「えっとね？　なんて言うか、その。そういう雰囲気じゃ無かった」

おい、向島夫妻。ナニをしてやがる。

立ったままのまきる。座ったまま動けない僕。場を支配するのは不自然な沈黙。

その沈黙を必死で破ろうと、まきるが僕の前に座り、おじさんからのプレゼントを膝に置いた。

「と、とりあえずこれでも開けようよ！　布団はお母さん達が居なくなってから探せば良いし！」

「そ、そうだな！　僕も開けるか！」

僕の背後に隠しているモノ。空気を読まない向島夫妻。クリスマスの夜。

中学校の冬の体操着を着ているまきるの脚は、正座のせいでくっきりと形が分かる。陸上で鍛えられ無駄な肉の無い、されどしっかりと女性的な柔らかさを主張する脚。

小柄な体格に合わせたような細い腰と小さい胸。形の良い顎から可愛らしい口元。小動物のような大きな瞳は純真で、キメの細かい肌はまだ少し赤みが差したままだ。

いかに僕とまきるが幼なじみで男女の意識が薄い間柄だと言っても、否が応でも意識してしまう。

だめだだめだ。そういうのは駄目。

邪念を振り払うように、僕はプレゼントを開けた。

「……紙？」

手のひら大の箱の中に入っていたのは、二つ折りにされた一枚の紙だった。

まきるの箱にも同じものが入っていたらしく、首を傾げている。

開いてみる。

『道隆君へ。

メリークリスマス。きっとこのプレゼントを君が読む頃、私はとても手の離せない状況になっているだろう。そして君は今、まきるの部屋で寝るか寝まいかの瀬戸際に違いない。

もしかしたら気付いているかも知れないが、その部屋に布団は一つしかない。予備の分は私が隠した。

何故そんな事を、と訊かれれば私はこう返そう。

――ハッピーメリークリスマス。

聡明な道隆君なら理解してくれるはずだ。私はそう確信している。

強要はしないし、恋人になれとも言わないが、これをきっかけに少しくらい君達が意識し合ってくれたら本望だ。

では、良い夜を。

追伸

まきるにも似たような内容の文章を送っています。反論は許しま

せん。

追伸の追伸

朝まで下には降りて来ないで下さい（笑）』

僕は全身全霊を込めてこの手紙を握り潰した。

一体どうしたんだおじさん、と諸行無常を嘆いていると、まきるも読み終わったのか、丁寧に手紙を箱に戻して、ゴミ箱に捨てた。

「お父さん、やって良い冗談と悪い冗談があるよ」

憂いの表情で遠くを見るまきる。僕も同じような表情だろう。

手の中の紙屑をゴミ箱に投げ、僕は仕切り直した。

「おじさんの冗談は無視するとして、どうする？　流石に今一階に降りる程、僕は野暮じゃないぞ」

「んー」

悩むまきる。

冬真っ只中に、いくら暖房が効いているとはいえ、何も無しに寝るのは遠慮したい。

だからと言って同じベッドで寝るほど僕達も子供じゃない。何か起こるとかそういう訳じゃないけど、その位の分別はある。

「……まあ、あたしは別に同じベッドでも良いよ。昔は良く一緒に寝てたし」

分別は無かった。

仕方ないなぁ、と困ったように笑いながら話すまきる。きちんと教育してくれ、おじさん。今日はおじさんの印象が大暴落だ。
おじさんの手紙のせいか、妙に魅力的なその提案。いつもの僕ならどうしただろう。軽く了承して早々と眠っただろうか。それとも断固として断って朝まで起きているだろうか。

どう返すか迷っていると、まきるは立ち上がった。

「まあでも、道隆君が嫌ならあたしは朝までゲームでもして起きとくよ」

ひまわりのような笑顔。そうだ、こいつはいつでも人の事を思いやれる、こういうやつなのだ。きっと僕が朝まで起きとく、と言ったら、気を使ってそれに付き合ってくれる。

だから、僕が言うのはこの言葉。いつもの僕が言う言葉。

「いや、僕も別にそれで良いぞ。もう遅いし、さっさと寝るか」

いつぶりだろうね、と笑ってベッドに向かうまきる。僕も立ち上がって、振り返るようにベッドに向かう。

なんか踏んだ。

「あ」

言葉を発したのはどちらだったろうか。僕には分からない。
すっかり忘れていた存在。足からはみ出た繊細な少女の絵。

「それ、見たの？」

さっきまでとはうって変わって平坦な声。隣に立っているまきるを見れない。
僕は足下だけを見て、こくりと頷いた。
突然、まきるは足下の本を引っ張り出し、胸に抱えながら僕に言った。
「ち、違うんだよっ！　これは友達の女の子が貸してくれただけで、決してあたしの私物じゃ無い訳で、更に言うならあたしも読むまで内容を全然知らなくてああもうなにこの説得力の無さっ！」
うがー、と一人で慌てるまきる。そういえば僕のコレクションを見られた時は、僕もこんな感じに焦ったっけ。
僕はまきるの肩に手を置いた。
「大丈夫、男ならそういう事、あるよな？」
「あたしは女の子だよ！　そりゃ、ちょっとはこういうのに興味はあるけど……」
ゴォー、と暖房が強くなった。
なにそのカミングアウト。もうちょっとタイミングを読んでくれ。
俯いたまきるの髪がさらりと揺れる。二人とも動かない。いや、動けない。
肩に置いた手が熱を持つ。意識すると、その熱は優しく柔らかい事に気付く。
僕が無言で手をどかすと、まきるは無言でベッドの下に少女漫画を戻した。

パンパン、とまきるが膝を払い、居住まいを正して僕を見た。

「え、ええっとっ。じ、じゃあ、寝ようよっ」

身長差のせいで見上げるまきるの瞳は恥ずかしさで潤み、行き場を探した指先が体操着の裾を掴む。

ふい、とベッドに向き直るまきる。だけど入ろうとしない。

さっきから空気がおかしい。僕とまきるの間は、こんな甘酸っぱい緊張を孕んだ空気じゃ無いはずだ。

したたかに打つ心臓。

「えっと、そ、それじゃ先にまきるが入ってくれ。僕は電気消すからっ」

「わ、わかったっ」

電気を消すから、と自分で言ってどきりとした。幸いまきるは疑問を持たなかったが。

どこかぎこちなくベッドの毛布を持ち上げるまきる。膝立ちになった後ろ姿は、無防備な丸い曲線を僕に晒している。

反射的に目を逸らす。良いよー、と小さな声でまきるが言った。

「じゃあ、消すぞ」

「うん」

口元まで毛布をたくし上げ、一層小動物的な雰囲気のまきるを見て、僕は壁のスイッチで電気を消した。

記憶を頼りに歩き、手探りでベッドの位置を確認する。
ベッドの端を手で掴むと、まきるが向こう側に詰める気配がした。
この例えるなら付き合い始めのカップルが初めて一緒に眠るような、そんな例え話にもならない状況になったのは何故だ。どこで間違った。
けど今更後にも退けない。幼なじみをこんなに意識しているなんて、認めたく無い。

死地に赴く決意を固めて、毛布を捲る。上質な布団の肌触り。うちより大分良い物だ。
出来たスペースに体をゆっくりと滑り込ませ、乱れた毛布を元に戻した。

ベッドはシングルだからか、まきるとの隙間は数センチだ。さっきまでまきるが居た場所から、すぐ隣のまきる本人から、ぬくぬくとした体温を感じる。

暗闇の中に沈黙とまきるの匂いが溶け合う。嗅ぎ慣れた筈のその匂いが、妙に頭に残った。

「せ、狭いね」

もぞり、と隣で動く感覚。寝返りを打って向こうを向いたらしい。足が触れ合う。

この位の接触は数え切れないくらいある。別段、意識しない程の接触。
だけど、全ての触覚が今はそこに行く。明らかに自分の肌とは違う滑らかさ。ずっと陸上部で走りつづけてそれでも尚、僕より小さな女の子の足。

落ち着きかけていた心臓がまた騒ぎ始める。それと同時に、僕の中の悪魔も声を大きくし始めた。

まきると僕は仲が良い。まきるは僕からの大概の頼み事は断らないし、僕だってそうだ。多分、人生で最も近しい人。

そういう事に興味ある、というまきるの発言に、さっきの少女漫画の絵が重なる。知らない男に知らない顔を見せながら、まきるはああいう事をするのだろうか。

おじさんの手紙。一緒の布団で寝る、という事。クリスマスの意味。まきるの匂い。離れない足。

道隆、襲っちゃえば？

頭にアドレナリンを直接ぶち込まれたような痺れが走る。駄目だ、という理性といっちゃえいっちゃえ、という明日を省みない誘惑。

正しい答えを求めて暗闇の中で更に目を瞑る。触れたままの足が熱い。

布団に入ってまだ十分も経っていない。まきるはまだ起きているだろうか。

手を少し動かせば、もっと触れ合える距離。しかし、越えてしまうと後には退けない、数センチの境界線。

思考はぐるぐる回り始める。行くか行かないか。大丈夫か拒否されるか。いやこんな事を考える事自体がもう既に違うのではないか。

その内、思考はゆっくりと眠りに誘われ始める。どれだけ時間がたったのだろう。それも分からない。

これで良い。理性の勝ち、とは言えないが、少なくとも間違いじ

ゃない。
明日は雨だろうか。そういえば風呂に入ってないな。
否定も肯定も曖昧になっていく。考え事は散り散りになり、僕は夢の狭間へと――

「んんっ」

旅立とうとするその瞬間、鼻にかかった甘い声と体に感じる重みで、現実に引き戻された。

何があった、と右手を動かそうとすると、がっちりと何かに挟まれて動かせない。
そこまで試して現状を把握する。どうやら寝ぼけたまきるが、僕の上に乗りかかっているらしい。右手を太ももに挟んでホールドする形で。

マズい。こいつはマズいぞ。蘇るさっきまでの葛藤。じわじわと速くなる鼓動。
右半身に感じる他人の体温。首もとにかかる吐息。横を向けばシャンプーとまきる自身の匂いが入り混じった黒髪に鼻先があたるだろう。
そして指先までやわやわとした厚みに潰されている僕の右手。これが神の試練なのかチクショウ。

また僕の中の悪魔、いや大魔王が叫び始める。『ほら、その右手は何の為にある。今、この時の為だろう！　立ち上がれ、道隆！　いや道隆のムス』黙れ。十八禁にしたいのか。

それでも黙らない大魔王と心臓。部屋の温度は高く無いはずなのに、僅かに汗が出始める。触れ合う部分が熱を持っているのだ。

自分で挟んでおいて違和感があるのか、もぞもぞと脚を摺り合わせるまきる。慌てる僕。
しかしここで変に力を入れたら、それこそマズい。何がマズいって、色々マズい。

どうしようもなく力を抜いていると、まきるの動きが止まる。

良かった。一線は越えないで済みそうだ。
僕が安堵していると、まきるは寝ぼけたまま、抱き枕の要領で僕の右手をぐいっと深く押し込んだ。

幸いにも不幸に、手のひらとか指先とかは太ももの拘束を奥に抜け出し、何も感じない。
だがしかし結果として手首の付け根辺りが、その、あの、何というか、非常に危険な場所に移動してしまった。
意識的にではなく（ここ大事！）全神経が一点集中する。

太ももの付け根付近なだけあって圧力は増している。体操着の合成繊維を通して伝わるその包み込むようなその圧力は、無骨さの欠片も無く、ただただしっかりとした重みと柔らかな感触を手首に返す。
そしてその圧力が逃れる方向。言えない、見えない、言葉に出来ない部分。

一言だけ。他より熱くて、柔らかいです。

――限界だ。

何が限界なのか、ましてや限界がドコなのかも分からないまま、僕はそう思った。

頭の中にある紐は、今にも切れてしまいそうだ。

左手。左手があるじゃないか！

僕は自由な左手を使って毛布を持ち上げ、中に空気を入れる。

暖房はもうタイマーで切れているらしい。冷めかけた部屋の空気がこもった熱をさらっていく。

何をやってるんだ僕は。誰も、僕自身だってそんな事は望んでない。こんな空気に流されるような形なんて、きっと誰も幸せになんかしない。

もう大丈夫。間違えない。

暗い天井に浮かぶのは、父さん、母さん、翔子さん。おじさんは流れ星になった。

そして最後に、まきるのひまわりのような笑顔。

大切なんだ。履き違えちゃいけない。

僕はためらいなく右手を引き抜く。振動のせいか、んんっ、とすぐ横から聞こえたが、もう気にしない。

さて、寝るか。

僕は両手を胸で組む。まきるが引っ付いたままだが、もう邪念は

無い。
そのまま眠りを迎えようと穏やかな気持ちになっていると、右半身の重みが消えた。
何だ、と横を見てみると、まきるが無表情で僕を見下ろしていた。
もしかしてさっきまでずっと起きてて、軽蔑されたか？
最悪の想像が駆け巡る。
闇夜の沈黙の中、僕が内心の汗を隠していると、まきるは添えるようにそっと僕の顔に手を当てた。
「……んー」
ゆっくりと近付くまきるの顔。まさかの急展開だ。
混乱して混乱する。もしかしてまきるは僕の事が好きだったのか？
互いに悪いようには感じていないと思っていたが、まさかこういう形で知る事になるなんて。
近付き続けるまきるの唇。どうする。避けるか、受け止めるか。
そもそも僕はまきるをどう思っているんだ？　好きなのは恋なのか、ただの親愛なのか。ああ駄目だどうしよう。
容赦無く近付くまきる。小さめの、どんな男でも落とせそうな可愛らしい唇。
だめだ、もう避けきれない！
――コツン、と額が当たる。

超至近距離。互いの吐息が絡まる。この距離で見ても、まきるの肌にはしみ一つ無く、頬に当たる髪からは強くまきるの匂いがした。

なんだ、そういう事か。僕は理解した。

無表情のまま不意にまきるは頭を上げる。

「最後の逆転、ココナッツヘッドバットー」

気の抜けた声。寝るまでやっていた格闘ゲームの技名と共に勢い良く落ちてくる頭。その僅かな時間に僕は後悔と諦めを感じながら、こう思った。

――忘れてた。そういえばこいつ、漫画みたいな寝相の悪さだった。

寝相だから遠慮も何もない、本気のヘッドバットが額に当たる。痛みに意識が遠のいていく。けど、その痛みに抗う気は起きない。

僕は最後に体全体にのしかかる重さを感じながら、意識を手放した。

その時の僕の瞳からは、一筋の涙が流れたとか流れなかったとか。

涙が出るほどクリスマス　杉村道隆編

了

涙が出るほどクリスマス！　向島光太郎編（前書き）

微エロ、下ネタ注意です！

涙が出るほどクリスマス！　向島光太郎編

結論から言おう。私、向島光太郎は向島翔子を途方もなく愛している。

娘とその幼なじみが階段を上がる音を聞きながら、唐突に私はそう思った。

テーブルに隣り合って私と翔子さんは、酒を呑みながら他愛の無い話をしている。そしてその一言一言に愛を感じてしまうのだ。

「翔子さん、愛しているよ」

「はっ、もう酔っ払ったのかよ」

堪えきらずに出た言葉はあっさりと返される。

私は良くこの言葉を使うし、彼女も私から言われ慣れている。娘や他人の前ならともかく、二人きりだと余り効果は無いのだ。

だけど言わずにはいられない。今日は特別な夜だから。

一升瓶の焼酎のおよそ三分の一を呑んだ翔子さんは、僅かに上気した頬に手を当て、テーブルに肘をついた。

「そういえば光太郎。まきる達に何のプレゼントを渡したんだ？」

私と同じ中年に差しかかるはずなのに、年齢を全く感じさせない大きな瞳が私を真っ直ぐ見つめる。

娘とその幼なじみがプレゼントを開けた場面を想像して、私は堪えきれない笑みを零した。

「いや、大したものじゃないよ」

プレゼントの中の徹夜明けで少しハイになりながら書いた手紙は、ただの事後承諾だ。きっと素直な二人は言い付け通り、寝る前に開けるだろう。その時にはもう遅い。二人は空気を読んで下には降りて来ない。

プレゼントはいわば場所を提供しただけ。そしてそれをきっかけに、あの二人が付き合い始めてくれたら万々歳だ。

でも、もしあの二人が結婚する時は、新郎を一発殴らせて貰おう。

「何ニヤニヤしてるんだよ」

笑いながらも呆れ気味な翔子さん。久しぶりの酒のせいか、早くも酔いが回って来たらしい。が、潰れる訳にはいかない。

大丈夫大丈夫、と返して私は翔子さんの作ったつまみを食べた。

楽しい時間は早く過ぎるもの。場所をソファに移し、雑談をしたりテレビを見たりと、気が付けば今日という日も終わろうとしていた。

「おっ、今日はホワイトクリスマスだったってよ。全然気が付かなかったぜ」

隣でテレビのニュースに反応する翔子さん。焼酎も残り少なくなった。

「そうなんだ」

少し呑み過ぎたせいで頭が回らない。

「おい、大丈夫か？」

一升瓶の大半を呑んで、流石に少し酔っているのか、可愛らしい頬を真っ赤に染めた翔子さん。

その優しさがいつもとどこか違う、と感じるのは、私が自意識過剰になっているだけだろうか。

「大丈夫だよ」

そうか、と言って翔子さんは瓶に残る酒を全て自分のグラスに注いだ。もう私に呑ませない、とでも言うように。

小さな肩と私の腕が触れ合う。

驚くほど小さな翔子さんの肩は、飾り気の無いパーカーに隠れている。この頼もしくも華奢な肩に、私は一体どれだけ助けられたのだろう。

「光太郎？」

再度、心配そうに見てくる翔子さん。愛くるしい瞳。子供のよう

に滑らかな肌。

翔子さんは不思議だ。若作りとか童顔とかそういうレベルじゃなく、本当に歳をとらない。

初めて見た時、鮮烈に私の心に焼き付いた容姿は今と寸分違わないし、体力や体型も落ちる気配が無い。この体で身体能力は人類トップクラスな所なんて、人体の神秘というか、地球人かどうかも怪しい。

「ったく、呑み過ぎだ。ちっとは歳を考えろよ」

そう言って立ち上がろうとする翔子さん。私はその手を取って、引き寄せた。小さな、少し荒れた手。

「大丈夫大丈夫。ちょっとぼうっとしてただけだから」

「……おまえの大丈夫はアテにならねえよ。無理して風邪ひいて、まだ仕事続けてたしな。大体だな、そこそこの稼ぎはあるし、アパートの収入だってあるんだから、ちょっとくらい仕事を減らしたって良いんだぜ？　別に贅沢したい訳でも無いしな。それにまきるだって……――」

酒のおかげかクリスマスのせいか、翔子さんは私の胸を背もたれにしたまま話し続ける。手は繋がったままだ。

うんうん、と私は翔子さんの話に相槌を打ちながら、その少し荒れた小ぶりな指をなぞる。くすぐったいのか僅かに避けられたが、逃がさないようにしてまたなぞる。

「――それにもし、おまえが稼げなくなっても、あたしがどうにかしてやる。ってか、ひっつき過ぎだっ」

これは頑張らないと、と強く思った。
今更になって離れようとする翔子さんを、後ろから手を回して留める。ふにふにとしたマシュマロにも似た、柔らかく暖かいお腹。
本気を出せば私の拘束なんて軽く解けるのに、翔子さんは暴れるのを止め、観念したかのように身を預けてきた。
私は目の前にある豊かな金髪に軽く顎を乗せる。

「まあまあ、今はまきるも道隆君もいないし」

「……それでも、まだこういうのは苦手だ」

翔子さんが喋ると手に振動が伝わる。この気持ちも伝われ、と手でお腹を撫でると、くすぐったいと手を叩かれた。

流れる星空のように輝く髪にキスを落とす。翔子さんは気付かなかったらしい。
そのまま鼻先を軽くうずめる。うちのシャンプーの香りと、翔子さん自身の甘い、男を惹きつける魅惑的な匂いがした。

いつまで経っても私はこの匂いに慣れない。花に引き寄せられる蜂のように、はたまた砂糖菓子に群がる蟻のように、私は求めてしまうのだ。

テレビの深夜番組の笑い声。私達の間の甘い緊張感。
酒で緩んでいた頭にビビッ、と衝撃が走る。

――ここが、今夜の山場だ！

一気に唸りをあげ始めた心臓が更に緊張を甘く、高い場所に連れ

て行く。
ここで、夜も更けてきたこの瞬間で、何かロマンティックな運びに持っていけたなら――
今夜はきっと、翔子さんとサムバディトゥナイト出来るんじゃないか？
私達はめったな事ではサムバディトゥナイトしない。それは翔子さんがあまり積極的では無い事に加え、私も仕事で忙しいからだ。勿論全く無かった、という訳ではないが。
しかし私も一人の男。まだまだ体だって若い。
翔子さんのことは愛している。愛があれば体はいらないとは思うが、体があるのにいらないとは言わない。むしろ欲しい。めっちゃ欲しい。サムバディトゥナーイト。
今日は浮かれてイケるかも、と思っていたが、実際それが現実味を帯びてくるとずしりとプレッシャーがかかってくる。
むくむくとこみ上げる烈火の如き感情。あえて今はそれをロマンと名付けよう。
そのロマンに後押しされ、私は閃いた。
「翔子さん、ちょっと待ってて」
怪訝な顔をする翔子さんを名残惜しみながら離す。
そして私は寝室に行き本命のプレゼントを取り出し、それを後ろ手に隠しながらリビングに戻った。
「翔子さん、ちょっとこっちに来て」

「なんだよ？」

残りの酒を煽るように呑んでいた翔子さんは、ゆっくりと立ち上がって近付いてきた。

その背中に廻り、優しく押して窓へと向かう。

戸惑いながらもなすがままに、翔子さんはカーテンのひかれた窓の前に立った。

低い頭越しにカーテンと窓を開けると、そこには僅かに濡れた庭があるだけだった。雪は、ホワイトクリスマスは無い。

「……結局どうしたいんだよ？」

「まあまあ」

入ってくる急激な冷気に肩をさする翔子さん。

私はプレゼント、長めのマフラーを後ろから翔子さんの首にかけた。

「メリークリスマス。プレゼントだよ」

翔子さんは巻かれたマフラーを手で確認して、振り向いた。

上気して赤い頬と、口元には不敵な笑み。

「はっ、ありがとよ。でも、これのために窓を開けたのか？　今日はいつにも増してキザだな」

私は翔子さんは正面から抱き締めた。伝わりあう柔らかい体温。うるさい心臓の音。

「違うよ。こうしたら、寒くて翔子さんが抱き返してくれるかな、と思って」

しばらくして、ん、と消え入るような声で、翔子さんは私の背中に手を回した。

身長差があるため、翔子さんの頭は胸の位置にある。きっと翔子さんに私の心臓の音は丸聞こえだ。だけど代わりに、翔子さんの早鐘の振動が手に聞こえる。

少し隙間を空けて、キスをした。桜色の唇は、極上の弾力を返しながら受け入れてくれた。

その感触からゆっくりと離れて、また抱き合う。私は豊かな金髪を愛しむように撫でた。

後ろでガチャリとドアが開いて、ガチャリとすぐに閉まる。まきるか道隆君が降りて来たのかも知れないが、空気を読んで上がって行ったのだろう。

頑張れ道隆君！　私は先に勝負を決めたよ！

幸福感、達成感、ここからへの期待。はやる気持ちをぐっとこらえて、私は翔子さんと離れた。

これ以上無い程の赤い頬。見上げてくる瞳が羞恥に潤む。流石にこれからどうするか分かっているのだろう。夫婦生活二十年は伊達じゃないはずだ。というかここまで来て何も無しはとっても困る。

「……風呂に入ってくる」

目を逸らして呟くように言い、着替えを取りに寝室へと入っていった翔子さん。

勝った！　ララララサムバディトゥナーイト！

どきどきとまだ動悸が収まらない。ここからはめくるめく大人の時間だ。そういえばいつぶりだろうか。ひゃっほう！

翔子さんが風呂場に続く洗面所へと入るのを見送って、私は寝室へと入った。そこにあるのは離れた二つのベッド。別に仲が悪い訳ではなく、仕事で遅くなったりした時に互いを起こさない為の配慮だ。

今日は一つしか使わない。

その今日使うであろう私のベッドに寝転び、見慣れた天井を眺めた。そわそわと落ち着かない。

酔いは心地よく体を縛る。

しばらくして、寝室のドアが音を立てて開いた。

翔子さんか、と思って視線をやると、そこにはやはり妻の翔子が立っていた。ただし、その姿はどこかで見た魔法少女のものである。

私は目を何度も瞬かせて確認したが、事実が変わるような事は無かった。

「し、翔子さん、その格好は一体……」

うろたえを隠せないまま情けなく声を上げた私に、翔子はいつの間にか手に持ったホウキをかざして、魔法の呪文を唱えた。

「リコントドケハ・ヤクショマデー」

その呪文により、私はたちまちロケットのような物体に変身して

しまった。
元が人間であったせいか、噴射孔は無い。しかし、ロケットなどという物にされてしまったからには、やはり大空を突き抜け大宇宙を旅せねばなるまい。
もう手は無いが、気持ちだけでも、とサムズアップしたつもりで翔子を見ると、翔子は輝くような笑顔で見事なサムズアップを返してくれた。流石は我が妻である。
目も無いため涙は流せないが、私は感涙してしまった。ああ、私達こそが真実この世界で最も通じ合っているのだろう。
気付けば娘のまきるや、その幼なじみの道隆など、旧知の仲の皆が私を囲んで拍手を送ってくれている。
ありがとう、ありがとう、と私は声も無く言い、力いっぱい空に向かって飛び立った。
そして私は天井を突き抜け、大気圏を抜け、ついには太陽のそばにある希望の社へと辿り着いたのだった。

はっ、と目が覚めた。いつのまにか寝てしまっていたようだ。
場所は変わっていない。私は一体どれくらい寝ていた？
酒の呑み過ぎで喉の渇きを感じ、焦燥に身を焦がされながら、時計を確認する。
夜中の三時半。隣のベッドを見ると、電気をつけたまま翔子さんは眠っていた。

私は激しい後悔を覚えた。何故ベッドに寝転んだ。疲れの残っている体で酒を呑んだ後にそんな事をしたら、眠ってしまうのは当然じゃないか！

そろり、とベッドから降りて翔子さんに近寄る。可愛らしい、年齢を感じないあどけない寝顔。

自然と手が伸びるが、無理矢理その手を方向転換させて、照明のスイッチへと進む。未練タラタラでとても遅い。

未練を断ち切るように近くに置いてあった水を飲み、最後にもう一度翔子さんの寝顔を見て、私は照明を消した。訪れる闇。さらばサムバディトゥナイト。

私は一人、布団に潜り込んで、枕を濡らした。

涙が出るほどクリスマス！　向島光太郎編

了

おまけ

向島翔子は風呂から上がって、普段全く着けない、若干大人なデ

ザインの下着を身に着けた。
見た目は完全に子供だが、中身は大人だ。これから何をするかくらい分かる。
ただ、分かるから、といってこの緊張が解れる訳じゃない。
上にまたパーカーを着て、翔子は洗面所から出た。
大きく深呼吸して寝室のドアを開ける。そして二つの離れたベッドの一つに、光太郎がぐっすりと眠っているのを見て、大きくため息をついた。
ここまで少しずつ固めた決心とかが呆気なく消えるのを感じながら、翔子は照明を消そうとスイッチに近寄った。
そこではたと止まる。光太郎はかなり酔っていて、殆ど潰れる寸前だった。それで潰れるように眠った。なら、起きた時に明かりが点いていた方が安心出来るんじゃないか。それに水も欲しがるだろう。
思い立ったら即行動。リビングに行き水をコップに入れ、照明のスイッチの近くに置いて、自分のベッドに潜り込んだ。
数分後、何か思い出したらしく、翔子はベッドから出て、洋服のクローゼットに向かった。
音を立てないようにまさぐり、目当ての物を取り出す。
ついさっき貰ったばっかりの、長めのマフラー。
それを持ってベッドに戻る途中、翔子は光太郎の寝顔を見た。色気のある整った顔立ち。所々にある皺が年齢を感じさせる。

腕を組んで、たっぷり迷って、寒さで湯冷めしてきた頃。

酔ってるからな、と誰とも無く言って、眠ったままの頬に口付けをした。

見つからないように布団の中に隠しながらマフラーを抱いて、翔子は眠った。

暖かかった。

おしまい

クリスマスの次の日

朝、向島家に泊まった杉村道隆は洗面所のドアを開けた。

「……おはようございます、おじさん」

「……おはよう、道隆君。ちょっと待っててくれ、今顔を拭くから」

「はい」

「……ふう。……どうしたんだい？　昨日の気の迷いは過ちだったんだ、と懺悔するような浮かない顔をして」

「うっ……！　……おじさんこそ、まるで大事な場面で寝てしまった次の日、みたいな顔してますよ」

「ぐふっ……！　た、互いに失敗したみたいだね」

「失敗というか失態というか……」

「……はぁ、何で寝たんだろ」

「あ、っていうかあのプレゼントは何ですか？　あれのおかげであんな葛藤を……！」

「プレゼント？　……ははっ、そういえばそうだね。まあまあ、ちょっとした老婆心ってやつだよ」

「まきるも怒ってましたよ」

「大丈夫、あの子は寝たら大体機嫌が直るから」

「まあ、そうですけど」

「まきるはまだ寝てるのかい？」

「はい」

「そっか。さ、翔子さんはもう起きて朝食作ってるよ。私は行くから」

「わかりました」

「あ」

「どうしました？」

「お姫様を眠りから覚ますのは王子様のキス……うん。道隆君、今からまきるに」

「怒りますよ？」

「な、なんか目がリアル殺意じゃないかい？　じ、冗談だよ、冗談」

「昨日でおじさんへの敬意は地面に落ちました」

「……反省してます。割と真剣に」

新年

翔子はお雑煮をテーブルに置いた。

「出来たぞ」

「ありがとう、翔子さん」

「お母さんありがとー」

「いただきます、と。ずず……、ふう。なんやかんやで新年だな」

「そうだね。歳を取ると一年が早くて仕方がないよ」

「ずず……。うー、冬休みも半分過ぎたー」

「おい、まきる。宿題やったか？」

「やってたらこんな事言ってないよー」

「まあまあ。元旦だし、今日は大目に見ようよ」

「見てよー」

「でも、後できちんとやりなよ？」

「……うんっ」

「何だよその間は」

「何でも無いよっ。あ、初詣どうしよう」

「んー、これ食べ終わったら行くか？」

「行く行くー。あ、どうせだし、歩いて行こうよっ」

「そうだね。たまには悪くないね」

「まあ、外は珍しく積もってるし、車よりは安全かもな」

「それじゃ、決定！　新年の向島家、発進だよっ」

餅

まきるはお雑煮の餅を一口食べた。

「やめられない止まらない、お雑煮」

「この前からおまえはお雑煮ばっか食ってるな」

「だって美味しいもんっ。お母さんも食べる？」

「いや、あたしはいいや。っていうかそれが最後の餅だし」

「えっ？」

「何だよその裏切られたような表情」

「じ、じゃあ、これが最後のお雑煮？」

「まあ、餅買ってきたらまた作れるけど」

「……ううん。もう正月も終わりだし、お雑煮離れしなきゃだもんね。悲しいけど、それが青春」

「冷めるぞ」

「ううー、お餅が美味しい……太るかな？」

「大丈夫だろ。まきるはあたしと一緒で太りにくいし」
「そうだよねー。……一部は太って欲しいけど」
「ん？」
「何でも無いよっ。さ、お雑煮お雑煮っ」

地球温暖化

皿洗いを終えた翔子はテーブルに着いた。

「み、水が冷てぇ……」

「ははは っ、冬だしね。ご苦労様」

「……ほれ」

「わっ、冷たっ！」

「はっ、水仕事なめんなよ」

「うう……、嬉しいけど悲しい」

「しっかし、今年はほんと寒いな。天気も悪いし」

「ふぅ、そうだね」

「地球温暖化とか、嘘だな」

「いや、嘘じゃないと思うけど」

「じゃあ、今だけもっと温暖化してくれ。この家限定で良いから」

「それはちょっと無理だよ」

「……役に立たねえな、温暖化」

「そんな暖房器具みたいに言っちゃダメ」

ピピピ　ピピピ

「お、風呂が沸いたな。光太郎、先に入るか？」

「いや、翔子さんが入ってきなよ」

「ん、じゃあお先」

ガチャリ

「……はっ！　もしやさっきのは『一緒に入らないか？』と言う意思表示！？　くっ、私としたことが……っ！！」

「お父さん、そんな訳無いよー」

賭博黙示録

部屋で一人財布の中身を確認し、まきるは感じていた。

このままでは今月の小遣いがピンチだ。

寒さに負け、学校帰りに買い食いをした記憶。ふと見かけて衝動買いした小物達。

それらは正に、現在まきるを苦しめている一因となっていた。

その時、まきるの脳裏に閃光、走る……！

ざわ……ざわ……

まきるはリビングに降り、ソファでくつろぐ光太郎に話しかけた。

「お父さんっ」

「どうしたんだい？　まきる」

「勝負、しようよっ」

「勝負？　いきなり唐突だね」

「どうしても今月欲しい物があるんだ。だから」

「つまり、まきるはお小遣い欲しい、と」

「うん」

「まあ、理由は分かったけど、私にメリットが無いじゃないか。それじゃ不公平だよ」

「あるよ。もし私が負けたら……」

「負けたら？」

「最近お母さんがこぼした『物凄く欲しいモノ』の情報をあげる」

「あの翔子さんが欲しがるモノ！？　あんまりそう言う事を言わない翔子さんが……」

ざわ……

「そう、あのお母さんが思わずあたしにこぼす程、欲しがるモノ。もしお父さんがそれをプレゼントなんてした日には、お母さんが惚れ直すこと間違い無しのモノだよっ」

「ゴクリ……」

光太郎は迷っていた。いかに欲しい情報と言えども、娘と賭け事が教育上良いはずが無い。もし自分が負けでもして娘が味を占めたら、それこそ妻に嫌われてしまう。

しかし……

同等に……　ある感情……！　感覚が光太郎を支配していたっ……！

それはっ……！

（欲しいっ……！　クリスマスの失敗っ……！　あの失敗……失態を帳消しにするチャンス……！）

ざわざわっ……

その思考は光太郎を絡めとるっ……！

底無しの……！　暗く濁った……！　欲望の沼へっ……！

「……分かった。受けて立とうじゃないか」

「お父さんなら、そう言ってくれると思ったよっ」

「それで、勝負って何をするんだい？　言っておくけど、格闘ゲームとかは駄目だよ。私が不利だから」

「大丈夫！　勝負の方法はいたって簡単。このティッシュペーパーの箱にクジを入れて、先に当たりを引いた方が」

「あ、それ駄目。漫画で見たことあるよ。イカサマするつもり満々だよね？」

「あれっ。バレてるっ！？　あたしの賭博黙示録が……！」

「面白いよね、カイジ。映画は見てないけど。さて、勝負はもちろん続行するよ？」

「ぐっ……この勝負……予測不能っ……！」

賭博黙示録（後書き）

続くっ……！

ざわざわっ……！

賭博黙示録2

ざわっ……！

「じゃあ、お父さん。もうお母さんも帰ってくるし、手っ取り早くサイコロの数の大きい方が勝ちで良い？」

「んー、そうだね。それならイカサマも無いし良いよ」

「えーと、サイコロは……」

「確か電話機の横に……あったあった」

「あたしが先攻でいい？」

「いいよ。はいサイコロ」

「じゃあ、三回勝負だよっ。とりゃ」

「返事も聞かずに投げたね。まあ良いけど」

コロコロ……

「あたしの数字は三だよっ」

「妥当な数字だね。じゃ、次は私」

コロコロ……
「お父さんは六かぁ。負けちゃった」
「はは、運だしね」
「じゃあ、次こそっ！」
コロコロ……
「二、だね」
「駄目かぁ。はい、お父さん」
「ほいっ、と」
コロコロ……
「あっ、五だよ。お父さん調子良いなぁ」
「ははは っ、本当だね。次がラストかも」
「かもねー。でも負けないよっ」
「頑張ってね」
ざわ……ざわっ……
この時、光太郎は違和感を感じていた。

（おかしい。何故まきるはこんなにも余裕がある？　ここから逆転の秘策でもあるのか？　……いや、サイコロにイカサマは出来ない。考え過ぎ、か）

「てりゃ」

コロコロ……

「……六、か」

ざわっ……

「ふふふっ、やった。お父さんの番だよ」

「……これは無理かな」

コロコロ

「一、だね。あたしの勝ちっ」

ざわざわ……

「まきる、サイコロを見せて貰って良いかな？」

「んー？　はいっ」

六と一。考えうる最悪の負け方。それに光太郎は疑問を抱かずにはいられない……

「……何も無い、か」

「当たり前だよー」

いくら見つめようとサイコロに異常は無い……　考え過ぎ……

そんな言葉が頭をよぎる……

（ただの偶然か？　……まあ、まだ私が有利だ。娘を疑うのは良くないしね）

「じゃ、まきるの番だよ」

「うん」

コロコロ……

が、またもや……！

「ろ、六か……」

「やったねっ。はい、お父さん」

「……ああ」

コロコロ……

「おおっ」

「い、一だって……？」

「やった。ラッキー」

それは確信……！

（六と一で二回連続負ける確率……。まきるのあの余裕……。……まきるはイカサマをしている！）

サイコロを提案してきたのはまきる……　三回勝負を半ば強引に決めたのもまきる……！

ざわざわっ……！

「ふふっ、どうしたの？　お父さん」

愛しい娘の微笑み……！　小悪魔……！

（しかし、ここで引けない……！　引けば思うつぼ……。　何か……何か手を……！　……はっ！）

「まきるっ……！　次はっ……！　最後はっ……！　私が先攻……先に投げさせてくれっ……！」

「え？　うん、別に良いけど。なんかお父さんアゴが長くなってない？」

「アゴっ……！？　そんなっ……！　そんな些細な事……。関係無いっ……。関係無いんだっ……！」

「えーと、はい」

サイコロ……！　ただの六面体……！
だがっ……！　運命の一投っ……！

「行けっ……！」

コロコロ……

イカサマは分からない……！　しかし……　ここは進むべき時……！

「あ、六だ」

「よしっ……　よしっ……！」

暁光……！　予感的中……！
先に投げれば勝てる……！　恐らく……そういう仕掛け……！
突破っ……！

「うーん、これはあたしの負けかなぁ」

ざわざわっ……！

（おかしい……。ここまで来てまだ余裕がある……。これは演技じゃない……？）

光太郎は見ようとする……！　娘の……
その背後の真実を……！　全ての答えをっ……！

（そもそもまきるが勝負を仕掛けた理由は……？　お小遣い欲しさ

……。急な出費がある……。私に勝たなければお小遣いは貰えない……はっ！）

天啓っ……！　来たるっ……！
全ての紐が解けるっ……！

「まきる、ちょっと待った」

「ん？　お父さん、どうしたの？」

「茶番は、止めないかい？」

「ち、茶番？　や、やだなぁ、何を言って……」

「私を侮ってはいけないよ。謎は全て解けた」

「お父さんそれ違う漫画」

「まきるの目的はお小遣いじゃないね？」

「……」

「お小遣いは手段。そもそも勝負が成立した時点で、まきるの目的は達成していた。そして本当の目的は……」

「……そう。お父さんの思ってる通りだよ。あたしは『お母さんが欲しがっているモノ』を買うためのお小遣いが欲しかった」

「やっぱり。どうもおかしいと思ったんだ。まきるの本当の『勝負』は私に勝負を受けさせる事だったんだね」

「うん。これならどっちに転んでも『お母さんが欲しがっているモノ』が手に入る。それはあたしも欲しいものだったから」
「それならそうと言ってくれれば……いや。過ぎた事はもういいか。それで結局、翔子さんの欲しがっているモノって一体……？」
「……それは――」
ガチャリ
「ただいま」
「し、翔子さんっ」
「お、お母さんおかえりっ。……あ、あたし部屋に行くねっ」
ガチャリ　バタバタ
「ん？　おう。……光太郎、サイコロで何やってたんだ？」
「い、いや、特に何も」
「そうか。んじゃ、あたしは晩飯作るから」
「えっ？　ああ、そうだねっ。じゃあ、私も仕事するかな、ははっ」
「んー？　まあ良いか。～～～♪」
（鼻歌？　翔子さん、よっぽど上機嫌なんだな。何かあったのか。

もしかして欲しがっているモノと関係が……まきるに後で話を聞きに行こう）

光太郎はそう思いながらパソコンを開いた……。

謎は深まる……

敗者も……　勝者も……

「はっ、やっと手に入ったぜ。あたしの欲しいモノ」

第一部　完

賭博黙示録２（後書き）

続きません！

ゲーム

リビングでゲームをしているまきるに光太郎は声をかけた。

「まきる」

「んー、なにー？」

「結局、翔子さんの欲しいモノって何だったんだい？」

「ああ、それはね」

「うん」

「これ」

「……どれ？」

「だから、今あたしがしてるゲーム」

「……翔子さんって、そんなにゲーム好きだったっけ？」

「ううん、普段はしないよっ。でも、ちょっと画面見てみて」

「……あれ、何か見たことある絵柄だ」

「そう、これはお母さんの好きなジブリが協力してるゲームなんだよ。ＣＭ見てから欲しい欲しい言ってて、あたしもしたかったし」

「そういう事ね」
「まあ、自分で買ってきたのは予想外だったけど」
「……ゲームか。盲点だったなぁ」
「お父さんは全然しないもんねー」
「昔から馴染みがなくて」
「あははっ、そんなイメージだもんねっ。あ、やっと戦闘だ」
ガチャリ
「まきる、九時からはあたしの番だからな」
「えー、今からやっと良い所なのにー。……もうちょっとっ」
「駄目だ。あたしだって早く進めたいんだ」
「えー、けちー」
「あたしが買ってきたんだから良いだろ」
「でも、本体はあたしのだよっ。お母さんは昼間暇なんだから……
……！」
「えーと、二人とも喧嘩は良くないよー。ここは間をとって私とテレビでも……」

「光太郎は静かにしとけ！」

「お父さんは黙ってて！」

「……あれ、私まさか二次元に負けてる？」

散髪

光太郎は髪をかき上げ、ため息をついた。

「……そろそろ髪切ろうかな」

「光太郎、それならここ行ってみねえか？」

「ん？　なに、翔子さん。『レ・サペは、安くて上手くてスピーディー！　スタッフが笑顔でお待ちしております』って、なにこれ」

「最近出来た美容院のチラシ」

「美容院？」

「美容院」

「別にそんな良いところに行く必要ないよ。人前に出る職業でもないし、私は男だし」

「最近は男でも行くらしいぞ」

「そうなの？　……でもなぁ」

「行かねえか？」

「美容院って若者ばっかりで、おじさんの私が行っても……」

「そっか。んじゃあたし一人で行って来る。せっかくだし、一緒に行こうかと思ってたけど」

「あ、もしもし、レ・サペさん？　ちょっと予約したいんですが。はい。あ、二人分お願い出来ます？」

「その変わり身の早さは尊敬するぜ」

ほつれ

まきるは制服のボタンを気にしながらリビングに入った。

「ただいまー」

「おかえり」

「あ、お母さん。お父さんは？」

「なんか出かけていった」

「そっか」

「それ、どうしたんだ？」

「え？　ああ、ボタンの糸がほつれて、取れそうだけど取れない状態」

「縫うか？」

「うーん。ちょっと待って。やりたい事があるんだっ」

「ん？」

「……せいっ」

ブチッ

「……それがやりたい事か？」

「やっふー！　一度やってみたかったんだっ。勢い良くボタンを引きちぎるのって、ああっ！？　布地までほつれたっ」

「うん、おまえの頭もほつれてないか？」

靴下

テレビから流れるニュースに、まきるは疑問を抱く。

『……靴下を盗んだ容疑で、県内の〇〇容疑者を逮捕しました。容疑者は欲しくてたまらなかった、我慢できなかった、と供述しており、警察は調査を進めています。なお、容疑者は過去、何度も同じような犯行を繰り返していたと見られており……』

「ねぇ、お父さん」

「ん？　なんだい？」

「靴下の何が良いんだろうね」

「まあ、世の中色んな人がいるから」

「でも、靴下だよっ？　せめてほら、下着とかなら分かるけど、靴下は……」

「フェチ、ってあるよね？　例えば筋肉フェチとかメガネフェチとか」

「うーん、確かにそういう友達がいるけど」

「そして脚フェチがあって、それが高じて靴下フェチ、あるいは匂いフェチもある。って考えたら、まあ分からないでも無くない？」

「……ありえるような気がしてきたっ」

「ちなみにまきるは何かフェチはあるかい？」

「んー、……感触フェチ？」

「ぬいぐるみとか？」

「ううん。人のお腹とか、背中とか触るのが好きかもっ。お父さんは？」

「私は……そうだなぁ。……髪フェチ、かな」

「へー。だからお母さんに髪を伸ばすように頼んでるんだっ」

「まあ、ぶっちゃけ翔子さんが絡んだら、脚だろうが腕だろうが匂いだろうがフェチるけどね」

「そのぶっちゃけはいらなかったかなー、個人的に」

日曜日

日曜日の昼下がり。まきるはテレビを眺めている光太郎に話しかけた。

「お父さん」

「ん？　なんだい」

「あたしね、今……」

「うん」

「びっくりするくらい暇だよっ。いぇい」

「テンションは高いね」

「日曜日のこのテンション！　部活も休みだし、一体どうしてくれようっ」

「友達とは遊ばないのかい？」

「うん。今日は家にいる、って決めたからっ」

「どうして？」

「なんとなく」

「そうかい。じゃあ、勉強は？」

「……夜になったらするよ！」

「……まあ、あまりうるさくは言わないけど、最低限はしようね」

「はーい」

「あ、そうそう」

「んー？」

「次のテストは良い点取らないと、翔子さんが本気で怒る、って言ってたよ」

「あははっ、大丈夫大丈夫っ。あたしだって本気を出せばテストの一つや二つ……勉強してきますっ」

「まったく。もうちょっと私も厳しくするべきかな。教育教育、っと」

バッグ

翔子は家の前で光太郎と鉢合わせした。

「おう」

「翔子さん」

「今日も寒いな」

「そうだね」

「鍵は、っと……」

ブチッ

「あ」

「うわっ。……バッグの紐が切れちまった」

「大丈夫？　翔子さん」

「あたしは大丈夫だけどよ、なんか不吉だな」

「ははっ……」

「……」

「……」

ヒュォオオ

「な、中に入ろうぜ」

「そ、そうだね。うん。別に不吉な事なんて何も無いよ、多分」

ガチャリ

「た、ただいま……わっ！？　ま、まきるが自分から勉強してるだと！？　まさかこれは不吉の象徴……！」

「いきなり失礼だよっ、もー。せっかく人がやる気になってたのに」

すもももももものうち

光太郎はパソコンを閉じる。

「ふう、今日はおしまい、っと」

「おつかれさん。光太郎、茶でも飲むか？」

「うん」

「コップ、と」

コポポ

「ありがとう、翔子さん」

「おう」

「ずず……はぁ。あ、翔子さん」

「ん？」

「すもももももものうち、って言える？」

「何だよその呪文は」

「ただの早口言葉だよ。言える？」

「んーと、こほん。すもももももものうち。何だよ結構簡単だな」

「じゃあ、バスガス爆発、はどう？」

「……バスガスばすばすっ」

「ははははっ、言えてない言えてない」

「んなろっ。じゃあ光太郎、技術室美術室しゅじゅしゅしゅししゅ、って言ってみろよ」

「最後の手術室が言えてないよ」

「うるせっ。とにかく言ってみろって」

「ふっ、いくよ」

「早く」

「技術室美術室手術室」

「……っ！」

「はっはっはっ。早口言葉で私に勝とうなんて十年早いよ」

「ぐぬぬ……！」

「これが我が家のお父さんとお母さんです、まるっ、と。やっと宿

題のレポートが終わったよー」

腹減り

どこか元気の無いまきるは呟いた。

「お腹減った……」

「まきる、まだ夕方だよ？」

「それでも、お腹減った……。アンパンマンの顔が食べたい……」

「といっても、翔子さんは居ないし……私が何か作ろうか？」

「えっ、お父さん料理出来るのっ？」

「そりゃ翔子さん程じゃないけど、簡単な物なら」

「作って下さいっ。さっきからお腹が鳴りっぱなしだよー」

「ん、分かった。一応、リクエストは？」

「肉的な何か！」

「了解。ちょっと待ってて」

「はーい」

十五分後

「出来たよ」

「いただきまーすっ」

「召し上がれ」

「もぐもぐ……肉満載で普通においしいよっ」

「ははははっ、そりゃどうも」

ガチャリ

「ただいま」

「あ、お帰り翔子さん」

「ん？　光太郎が作ったのか？　それ」

「うん。久し振りに料理なんてしたよ」

「……肉使い切っただろ？」

「うん」

「じゃあ、今晩のあたし達のメニューは肉抜きだな。ポテトサラダとキャベツの千切りと大根のお浸し、どれが良い？」

「てへっ、私失敗しちゃった？　……今すぐ肉、買ってきます」

恵方巻き

まきるはソファに寝そべったまま言った。

「おかーさん」

「んー」

「節分の日は恵方巻き作ってよ、えほーまき」

「節分の日になったらな」

「うん。あ、今年はどこ向いて食べるんだっけ？」

「さあな。光太郎に訊いたら分かるんじゃねえか？」

「お父さんは今いないし……北北西？」

「……いや、東北……東……？」

「どっち？」

「んー。……じゃ、正解だった方が勝ちな」

「分かったっ。勝負だよっ」

ガチャリ

「ただいま」

「おかえり。光太郎、今年の恵方はどこだ？」

「今年の恵方？」

「恵方だよっ」

「……確か東北東だったような違ったような……」

「よしっ、あたしの勝ちだな」

「あははっ、元々当たる気してなかったけどねっ」

「何かしてたのかい？」

「ああ、どっちが恵方を当てられるか勝負してた」

「負けたけどねー」

「そういう事もあるよ」

「「ははは」」

一同、談笑を始める。

※今年の恵方は南南東です！

節分

まきるは恵方巻きを手に取った。

「いただきまーす」

「おう」

「南南東を向いて……もぐもぐ」

「あ、そういやまきる。今朝バレンタインがうんたら言ってたのは、何だったんだ？」

「……もぐもぐ」

「……？」

「……もぐもぐ」

「どうしたんだ？　急に黙って」

「……もぐもぐっ」

「……掃除した時、ベッドの下の本は机に置いといたからな？」

「なっ！　……もぐもぐもぐ！」

「なんだよ。あたしを無視した罰だ」

「もぐもぐっ！　……ごくん、はぁ。恵方巻き食べてる間は喋っちゃいけないのっ！　ってかあの本は友達ので……」

「そうなのか？　にしては随分前からあるけど。借りたもんはちゃんと返せよ？」

「……うう、なんでこんな目に……！」

おやじ

光太郎はパソコンを閉じ、気だるげに椅子から立ち上がった。

「よいしょ……っと」

「あははっ」

「ん？　どうしたんだい、まきる？」

「いや、お父さん今さっき、もの凄いおやじくさかったからっ」

「……マジ？」

「うん。かけ声とか、しんどそうな動きとか」

「……ちょ、チョベリバー」

「古いよっ」

「……自覚はしてる」

「ていうかお父さん、結構自分で自分の事をおじさん、って言ってるよね？　今更だよ」

「いや、そうだけど違う」

「そうなの？」

「自分から言ったり、普通に人から『年取ったね』って言われるのは良いんだよ。ただ、自分が無意識に取った行動からおやじっぽさが滲み出るのは嫌だ」

「複雑なおやじゴコロだねー」

「……本当に複雑だ……」

バレンタインダー

まきるはソファで寝転がる。

「昨日はバレンタインデーだったのだー」

「ああ。そういやそうだな」

「お母さんはお父さんにあげたの？」

「商店街行ったら結構チョコ貰ったから、その中の一つやった」

「あ、あたしも学校でたくさん貰ったからあげたよー。この時期は甘い物に困らないよね」

「そだな」

「話してたら食べたくなってきた。まだ残ってるから一緒に食べようよっ」

「んじゃ、あたしのも持ってくる。全然食いきれてないし」

「バレンタインデーさまさまだね。洋菓子戦隊バレンタインダー！」

「弱そうな戦隊だなそれ」

ツンデレ

光太郎はテレビを見ながらまきるに話しかける。

「まきる、今流行りのツンデレって、実際流行ってるのかい？」

「えー、それマンガとかの話だよ」

「いやでもほら、ツンデレカフェとかあるらしいし」

「ああ、そういえばそんなのあったねっ。でも、あたしはナシだと思うなー」

「そう？　普段はツンツン二人きりになるとデレデレって、分かりやすいギャップだから良いんじゃないかい？」

「えーとねー。じゃあ、ツンデレしてみるよっ」

「出来るの？」

「べ、別にお父さんのためじゃ無いんだからねっ」

「あ、もう始まってるんだ」

「はいこれ」

「ん？　飲みかけのお茶？」

「あたしが淹れたお茶を飲めるなんて、感謝しなさいよねっ」
「いや、淹れたの翔子さんだけどね」
「そ、そんな事無いんだからっ。もうっ！　あたし、自分の部屋に戻るんだからねっ」
「ああ、うん」
「……ちらっ」
「ん？」
「もうっ、なんで引き留めないんだからねっ」
「なんか日本語おかしいよ」
「……でも、そんなお父さんが……」
「お、ここからデレ？」
「……べ、別に好きなんかじゃ無いんだからねっ」
「……まきる、ツンデレってもしかして、そういう言い方しかしない子の事だと思ってる？」
「べ、別に見切り発車で始めた訳じゃ無いんだからねっ！　ほ、本当だよっ」

マスク

翔子はテーブルでテレビを見ている。

ガチャリ

「ただいま」

「おう、おかえり光太郎」

「やっぱりまだ寒いね。コートを脱いで、と……」

「そろそろ花粉も飛ぶし、マスクでも買って来た方がいいのかねぇ」

「そうだね」

「あたし、マスク嫌いなんだよな」

「でも、つけといた方が安心じゃないかい？」

「そりゃそうなんだろうけど。呼吸しづらいし、こう口周りがもわっとなるのが嫌だ」

「まあ分からんでも無いけど、風邪ひいたりとかしてからじゃ遅いし、つけとくべきだよ」

「んー、そうだよなぁ……。そういや最後にあたしが風邪ひいたのいつだっけ？」

「え？　確か結構前に酷い熱出した時が……えーと、十年前くらい？」

「ああ、んな前だったっけ。まあでも、その時以外ひいて無いしな……あたしはいいや」

「そういえばまきるもほとんど風邪ひかないっけ……」

「おい、なんだその顔は」

「い、いや、何でも無いよ。決して二人はちょっと頭がアレかもとか思ってないから！」

ポリフェノール

まきるは買ってきたジュースを見て首を傾げる。

「お母さんお母さん」

「あ？」

「ポリフェノール、って何？」

「そりゃ……ポリフェノールだろ」

「それは分かってるよっ。ポリフェノール入りのジュース飲んだら一体どうなるの、ってこと」

「んー、ポリフェノールねえ。名前だけならよく聞くけど、実際何が体に良いのかと言われると……」

「やっぱりあれ、美容とか？」

「そんな気はする。名前的に」

「うーん、美容かぁ」

「正直、糖分とか保存料とかたっぷりのジュース飲んでる方が、体に悪い気がするけどな」

「それは言わないお約束だよっ」

テレビ

まきると光太郎はテレビを見ていると、画面が突然砂嵐に変わった。

「ひゃっ」

「あれ、テレビが壊れたかな？」

「びっくりしたよっ」

「これ結構古かったしね。今まで映りが悪くなったりしたこと無かったのに、突然壊れるもんなんだなぁ」

「あれかな、地デジの呪い？」

「一応、地デジチューナー使ってたけど」

「あっ」

「どしたの？」

「次、あたしの観たいテレビが始まっちゃうよっ。その為にここで待機してたのに」

「んー、って言ってももう夜だから、電気屋も閉まってるよ」

「……なんとか出来ない？」
「私もそこまで機械には詳しく無いし、諦めるしか……いや、最後の手段がある、かも」
「最後の、手段？　……ごくり」
「これだよ」
「……手？」
「ほら、昔からテレビは叩いて直すって相場が決まってるし」
「……期待はしないでおくね……」
「まあまあ、案外オカルトも馬鹿に出来ないよ。では、いきます」
バシッ
「……直らないね」
「……そうだね」
「あーあ、諦めるしかないかぁ」
「運が悪かったと思うしか無いよ。明日買いに行くかな」
この時、宇宙で一際大きな超新星爆発が起きた。
その爆発は電波的な何かを発し、偶然にも向島家のテレビを直したのだ！

「あっ、映ったよっ」

「おっ、やっぱり叩いたのが良かったかな」

しかし、その電波は地デジチューナーにも作用していた！

『うふーん。あはーん』

電波によって色々乱された地デジチューナーは、有料放送をテレビに映し出す。いわゆる大人のチャンネルだ！

『いやーん』

「……」

「……」

リモコンでチャンネルを変えようとも、地デジチューナーは頑なに有料放送を流し続ける！

『そこはだめもう（自主規制）』

プチッ（コンセントを抜く音）

「さっ、あたしはそろそろ寝ようかなっ」

「うん、私も今日は早めに布団に入ろう」

「おやすみっ」

「お休み」

次の日、テレビと一緒に地デジチューナーも買い換えられました。

シング・ア・ソング

向島家のリビング。まきるはプリントをホッチキスで止めている。
翔子は黙って家計簿を書いている。

パチンッ

「ホッチキスで止めた～ふっふー」

「……」

「あなたの教科書は～」

「……ちらり」

パチンッ

「開かない～いや開けない～ふっふー」

「……」

「全てはゆめまぼろし～」

「……」

パチンッ

「でもそれが～きっとあ～い～だからー。ほっちきすいんざらばー」

「なんでやねんっ」

「うわっ。急にどうしたの？　お母さん」

「あ、悪い。あんまりにもその歌がアレで……」

「アレってのは酷いよー。作詞作曲あたしの名曲なのにっ。今作ったけどっ」

「いや、それにしてもちょっと言葉選びがな……」

「そこは歌唱力でカバー」

「カバー出来てたらあたしだって何も言わん」

「もー。分かってないなぁ、お母さんは」

「……何だその自信」

「歌はね、魂（ソウル）が全てなんだよっ。心の震えを声に乗せたら、もうそこに言葉は必要ないっ」

「いやだから乗ってねえから、魂（ソウル）」

音楽プレーヤー

テレビに映った音楽プレーヤーのＣＭを見て、翔子は呟いた。

「欲しいなぁ」

「えっ？　翔子さん、えっ？」

「何だよ、あたしが電化製品に興味持っちゃ悪いか」

「いや、悪かないけど……使える？　あれ、今流行りのｉＰｏｄだよ」

「んだよ。それがどうしたよ」

「ボタンとか無いよ。正確にはあるけど、殆どタッチパネルで操作するタイプ」

「は？　とりあえず再生ボタンくらいあるだろ？」

「いやだから、そういう操作は全部画面を触って行うんだよ」

「？　音楽プレーヤーだろ？　なんのこっちゃ」

「……よし、止めておこうね」

「んー、やっぱ人間自然が一番だな。うん」

4月1日

まきるは椅子に座っている翔子に話しかける。

「ねえねえ、お母さん」

「ん？　なんだ」

「今日、あたしの彼氏が遊びに来るよっ」

ガタッ

「うおおぃっ！　ち、ちょっと待て！　か、彼氏ってあれかっ。ここ恋人の、か、彼氏かっ」

「そうだよー、ひどいなー。あたしだって彼氏の一人や二人作るよ」

「いやまあそうだけど……っ！　あれかっ、道隆か！？」

「違う違う。お母さん達の知らない男の子。だから今日家に呼んだのっ」

「っ！　わ、分かった。ちょっとあたしに余裕をくれっ」

「あはは。まだ来るまで時間があるから大丈夫だよー。じゃ、あたし部屋にいるね。お掃除しなくちゃっ」

ガチャリ　バタバタ

「……心臓に悪すぎる……。しかし、やっとまきるも高校生らしくなったか。赤飯でも……ダメだ。なんか祝福出来るか微妙だ。はぁ。せっかく今まで道隆とくっつけようとしてたのに……」

ガチャリ

「ただいま、翔子さん」

「おう、光太郎か。聞いてくれよ。さっきまきるの奴が……」

「ああ、まきるに彼氏が出来たって話しかい？」

「お前、知ってたのか？」

「知ってたっていうか偶然そこで会って。今、玄関の前で待って貰ってる」

「なっ！？　ま、待て、今すぐ顔を見に……あ！　いや、掃除をしないと……」

――あ、もう来たのー？　上がって上がってー。

「待て！　今混乱してるから待て！　おい、光太郎っ。今すぐ止めてこい――」

ガチャリ

「……」

「……」

「……おい道隆。何だその『四月馬鹿。ドッキリ大成功』って看板は」

「……ドッキリ大……いえ。何でもありません」

「光太郎。まきる。来い」

「ははははっ。今日は四月馬鹿の日だから騙されるのが悪いんだよ。だからその目を止めてくれないかな、翔子さん？」

「え、えーとっ。あ、あたしは止めようって言ったんだよっ！　でもお父さんがっ……！」

「……ったく、今回は許してやる。ただ、今日は二人とも晩飯抜きな」

「えっ、地味にキツい」

「だから止めようって言ったのにー」

「……あの、僕、そろそろこの看板降ろしてもいいですか？」

「駄目だ。もうちょっと四月馬鹿になっとけ。馬鹿やろうが」

「……四月馬鹿で馬鹿を見る、か。」

「上手くないよ、お父さん」

勢い

まきるはぽつりと呟く。

「最近、勢いが無い」

「え、何の話？」

「ううん、なんとなくそう思っただけ」

「それなら良いんだけど……」

「そういえばお父さん」

「ん？」

「お花見とかってしないの？」

「あー、特に予定は無いけど」

「じゃあさじゃあさ、お花見しようよっ」

「……そうだね。たまにはみんなで出かけようか」

「やったー」

「こういうのこそ勢いが大事だからね。そうと決まれば場所を決め

よう」

「良いね良いね！　えーと、確か向こうの公園の桜がそろそろ満開だったような……」

「甘いね」

「え？」

「どうせなら遠出しよう。そうだね……いっそ県外まで行こうか」

「ぷ、プチ旅行だよっ、もはやそれ！」

「笑止！」

「はっ！？」

「その程度で驚かれちゃ困る。更に高級ホテルに宿泊して、プライベートビーチでワインをくゆらせながら夜桜を楽しむ……素晴らしいと思わないかい？」

「す、すごいよっ！　今年は豪華に花見だね！」

「まきるも何か言ってごらん」

「いいの！？」

「うん、言うだけはタダだから」

「ああ、今あたしの中の勢いがごっそりと減ったよ……」

ものまね

まきるは突然立ち上がった。

「花見がしたい！　もう近くの公園で良いからっ」

「すればいいんじゃないか？　飯くらいは作るぞ」

「お母さん、ほんとっ？　じゃあ、来週はお花見しよう！　決まりっ」

「人は適当に集めとけよ。どうせならそれなりに量作るから」

「うん、分かったよっ」

「さて、何にしようか……たまには洋風にしようかな……」

「そうだっ」

「なんだよ、さっきから落ち着きの無い」

「花見といえば、一発芸。参加する人には一発芸してもらおうっ」

「その認識はおかしくないか？　とりあえず、あたしはパスな」

「えー、そういうのあった方が楽しいよー。しようよー」

「普通は一発芸なんざ持って無いし、用意がめんどい。おまえは何

かあるのかよ」

「えっ……一番、まきる。お父さんのものまねしますっ」

「むっ」

「……翔子さん。桜はね、桜前線と共にやってくるんだよ。桜の前線って、素敵だと思わないかい？」

「……似てるような、似てないような」

「……じゃあ、お母さん。こほん。……ば、ばっかやろうがっ！」

「似てねえよ、馬鹿やろうが」

まきるは歩く、どこまでも！

どこまでも続く緑の平原をまきるは歩く。てくてくと、健やかな音を立てながら。

「へいへいほー」

楽しげな声が遠くに広がる。草をはむ馬が耳をぴくりと動かした。

「お待ちなさい、お嬢さん」

歩き続けるまきるの前に、それはそれは綺麗な金髪の女の人が立っている。

「私の名前はリズ・クライス・フラムベイン。このフラムベイン帝国の第三皇女だ。見たところ、この国の者では無いようだけれど、一体こんな所で何をしてるんだい？」

まきるはリズの紅い瞳をしげしげと見詰めた後、思い出したように言った。

「何をしている、って言われても、歩いてるとしか言えないよっ」

「では、どこへ歩いているんだい？」

「うーん、今は少し喉が渇いてるから、水のある方かなっ」

「そうか。ではあちらへ行くと良い。森の奥にある泉は、一度飲んだら一生忘れられない程の美味しさだから」

ありがとー、とまきるはリズに礼を言って、指された方向へと足を向ける。

てくてく。

森の小道をまきるは歩く。空は晴れ。小さな葉っぱも太陽に照らされて嬉しそうだ。

「へいへいほー」

楽しげな声が木々の隙間を抜けていく。枝の小鳥が首を傾げる。

「やあ、お嬢さん」

赤い首輪をつけた黒猫が前足を上げて、道の横から話しかける。

「私はニアという猫だが、こんな人里離れた森の奥まで何をしに来たんだ？」

「うんとね、この先にある、とっても美味しい水を飲みに来たんだよっ」

「そうかそうか、あの泉の水を飲みに来たか。では先に進むといい。ただし、その隣にある岩に触れてはいけないぞ。その岩には仕掛けがあって、触れた者を空に飛ばしてしまうんだ」

「分かったよー」

ありがとー、とまきるは猫に両手をぶんぶん振って、てくてくと歩く。猫は尻尾を揺らして見送った。

しばらく歩くと泉が見える。底の小石を数えられるほど澄んだ泉。

「うわー。綺麗な泉だー」

まきるはほとりによいしょと座って、懐から水筒を取り出す。

ごくごく。

「ぷはーっ。本当に美味しかったー」

綺麗な泉を見ながら飲む水は格別だが、どこかで誰かが首を傾げる。

些細なことには気付かない。まきるは周りを見渡した。見つけたのは、お昼寝に丁度良さそうな平べったい岩。

猫の忠告はどこへやら。まきるはごろんと寝転がる。

「うわっ」

岩の仕掛けはバネ仕掛け。まきるは空高く飛ばされた。

ひゅうう。

空の中には雲がある。雲の上には雲は無い。
雲一つ無い空の中、白い綿菓子のような雲の上をまきるはてくてくと歩く。

「へいへいほー」

空が吸い込み消える声。少し歩みが遅いのは、お昼寝が出来なかったせいだ。

「おい、ここで何をしている」

地鳴りのような低い声。姿の見えない男の声に、まきるはくるくる周りを見渡す。

「どこにいるのー？」

「質問に答えろ」

まきるはうーんと唸って答える。

「降りる場所を探して歩いてるの」

「降りる場所など無い」

「じゃあ、お昼寝が出来る所。ちょっと歩き疲れちゃった」

「そのような場所も無い。ここは空の上。およそ人の住むべき物は何一つ無い」

まきるは手をかざして白い地平線に目を凝らす。見渡す限りの白、白、白。木の一本も生えてない。

「ほんとだ。うーん、どうしよう」

「娘、取引をしないか？」

男の声は地鳴りのように響き、どこから聞こえてくるか分からない。

「取引？」

「お前が俺の妻になるならば、お前をそこから降ろしてやろう。ただし、この先俺の傍を離れることは一生出来ぬ」

まきるはうんうん唸って答える。

「あたしは十六歳だから結婚出来ないし、姿も見せない人と結婚なんて出来ないよ」

それだけ言って、まきるは雲に寝転がる。思ったよりは硬いけど、思ったよりは暖かい。

疲れていたのか、くうくうとすぐに寝息が聞こえ始める。

「そうか」

男の声が小さく弱く雲を揺らしても、まきるは夢から出てこない。

ぼすっ。

雲から突然大きな右手が突き抜ける。
その右手がくうくうと眠るまきるを掴み、また雲の中に引っ込んだ。

「叶わない恋など、するものではないな」

大きな目。大きな鼻。大きな顔。
雲を支えていた大男はまきるの寝顔をじろりと見て、静かに優しく地面に降ろす。

「俺の名前は周防晃。もう会うことも無いだろう」

どしんどしんと音を立て、晃は山の向こうに消えていった。

くうくう。

へいへいほー。

「へいへいほー」

自分の木霊に返事して、てくてくとまきるは歩く。眠ったおかげで体力は万全だ。

へいへいほー。

深い谷からまた木霊が返る。ここは山と崖の道。足場は悪いが元気に歩く。

「待て」

狭い崖の道の先、男が行き先を塞いでいる。

「俺の名前はエイジ・タカミヤ。悪いがここで死んでもらう！」

まきるはきょとんと聞き返す。

「どうしてあたしに死んで欲しいの？」

「今日の内にお前を殺さないと俺が死ぬ。東の魔女に呪いを受けた」

まきるはポケットから木の実を取り出す。

「これを食べたら良くなるかもっ」

「そんな物では治らない。魔女の呪いは強力なんだ」

どうしよう、と悩んでいると、空から滴が落ちてくる。

「とりあえず雨宿りしようよ」

「仕方ない」

まきるとエイジはてくてく歩く。崖の先には川があり、川を下ると道に出た。

雨はぱらぱら降り注ぐ。

煙がもくもく動いている。
「お前らどうした？」
煙を吐き出す車が止まり、窓が開いて子供が言った。
「雨宿りの場所を探してるの」
「ふうん。じゃあ、こいつに乗れよ。ついでに行きたいとこに連れて行ってやる」
まきるはぽんと手を鳴らす。
「じゃあ、東の魔女の所まで」
「あいよ」
まきるとエイジが乗り込むと、その金髪の子供はアクセルをぐいっと踏み込んだ。
「あたしは翔子。運び屋翔子だ。飛ばすぜ！」
煙と土を巻き上げて、車は東へ走り出す。あまりの速さにまきるの体は一回転した。
魔女の根城は大きなお城。不気味い黒い鳥が飛ぶ。

「ここが魔女の住処だ。あたしは次の街の行く」

うん、とまきるは頷いて城の門へと歩き出す。エイジも後ろをついていく。煙はもくもく遠ざかった。

てくてく。

「止まれ。ここは東の魔女の根城だ。通す訳にはいかない」

足下から聞こえるしゃがれ声。まきるはしゃがんで指で突く。

「わー、カエルが喋ってるよー」

「うるさいっ！　つ、突っつくな！　僕はここの門番だ。通りたければ金貨を寄越せっ」

カエルはぴょんぴょん跳ね回る。
まきるの代わりにエイジは話す。

「金貨は無いが、これならどうだ」

懐から出したのは金ぴかの本。開けもしない物語。

「うーん、これなら良いだろう。通してやる。ただし、東の魔女には逆らうな。逆らえば僕のようにカエルにされてしまう」

ぶるると緑の体を震わせて、カエルは城への扉を開ける。

「ありがとー」

まきるはてくてく入っていった。

城の中身は寂しい灯り。ぽつんと広がる影の支配下。

「へいへいほー」

「へいへいほー」

まきるとエイジは怖さを押しのけ、奥へ奥へと突き進む。

はっ、とエイジは気付いて話す。

「俺は何をやっているんだ。おまえを殺しに来たのに」

まきるは歩く。へいへいほー。

「まあまあ。あたしが魔女に頼んでみるから、それでダメだったら」

「ダメだったら？」

まきるは首を捻り、腕を組む。それからたっぷり考えて言った。

「まあ、その時考えるよっ」

明日の風は明日吹く。一先ず二人は魔女の元へ。
「ようこそ、魔女の部屋へ」
「私達が東の魔女です」
着いた部屋には二人の女性。しかし二人は同じ顔。
「私は綾音」
「私は琴音」
「「二人で一人の東の魔女」」
右を見て、左を見て、まきるは驚き大声を出した。
「すごい似てる！」
「誰と誰が似てる、だ！」
「誰と誰が似てる、ですか！」
双子の東の魔女達は、肩を震わせて怒る。
それはさておき、まきるはエイジを指差した。
「ねえねえ。呪いを解いてあげて。可哀想だよっ」
魔女達はにやりと同じく笑う。
「やだね。私は面白い物が好きなんだ。その男の苦悩は大層面白い」

「嫌です。私はあなたが嫌いですから。あなたのその気ままさが憎い」

まきるとエイジは驚いた。まさかそんな理由だったなんて！

「あたしの気ままさが憎いのは何で？」

「それは私がここから出れないから」

「俺の苦悩が面白いのは何でだ」

「それは私が退屈だから。退屈を紛らわすのは悪戯が一番だ」

魔女は互いに答えたが、まきるは納得出来ない。十歳の子供だって、そんなワガママで人を困らせないのに。

「そんなの、おーぼーだよ！」

「だったら私の憎しみを取り除いて下さい」

「理不尽だ！」

「だったら、私の退屈を紛らわせてくれ。そしたら呪いを解いてやろう」

二人の答えに二人は悩んだ。

悩んで悩んで悩んだ先に、きっと答えは見付かるはず。そう思って、また悩む。だけども答えは見付からない。

「ほらほらどうした。時間が無いぞ」
「もうすぐ日が落ちる時間です。そしたら男は命を落とします」
魔女達はワインを飲みながら話しかける。夕食の時間だ。
びびっ、とまきるは閃いた。
「じゃあじゃあ、私達もここに住むっ！」
思いもよらないまきるの言葉に、魔女とエイジはびっくりした。
まきるはうんうん頷いた。
「それなら気ままじゃ無くなるし、退屈だってしないよっ！」
魔女の一人がふふんと笑う。
「駄目です。そんなのじゃてんで駄目。私の憎しみはそんなのじゃ……」
だけど片方の魔女はからから笑った。
「ははは っ！　いいだろう、呪いを解こう。確かに退屈は無くなりそうだ！」
「姉さん！？」
違う表情の同じ顔。片方が手を上げて、細い光が飛んでいく。

「ほら、これで呪いは解けた。魔女の呪いは二人で一つ。一人が止めれば効果は消える」

エイジは喜ぶ。魔女は叫ぶ。

「姉さん！　私は納得してないんです！　そう、姉さんはいつも私に何も言わずに決めて……」

「琴音。見苦しいぞ」

「もう、知りませんっ！　後から後悔しても……！」

魔女達の喧嘩は魔力に乗って、世界の空を駆け巡る。空気の流れはどこまでも。

リズの頭上を過ぎ、ニアの鼻先を掠め、晃の足元で戯れて進む。

そして翔子の髪を抜け、流れはかえるにたどり着く。

ぽんっ。

「や、やった。ついに元の姿に戻れた！」

元の姿に戻った杉村道隆は、うん、と背伸びして家に帰った。

魔女の喧嘩は止まらない。まきるはそうっと手を上げる。

「ねえねえ。食べ物はどこ？」

「ああもうっ！　あなた達はどこかに言って下さい！　邪魔です！」

魔女はいつでも一方的だ。
まあいっか、とまきるは城から出て、言った。
「じゃあ、ここまでだね」
エイジは頷き礼を言う。
「ありがとう。おかげで呪いが解けた。礼と言ってはあれだけど、この先には草原がある。そこは天気が良いから、うんと光を浴びるといい」
ありがとー、と言ってまきるは歩く。
少し歩くと光が空から差してくる。地面はだんだん緑の道に。
「へいへいほー」
まきるは歩く。そこが道。暖かい風の吹く草原。
少し騒がしかったけど、過ぎれば楽しかった時間になる。まきるは元気に歩いていく。
まきるは歩く。
ふと、止まって振り向いた。

そうしてまた、まきるは歩く。へいへいほーと、てくてくと。

今度はどこを歩くだろう。小鳥が高く空を飛んだ。

まきるは歩く、どこまでも！　了

梅雨

朝、まきると翔子はテレビを見ている。

「うわー、今週雨ばっかりだねー」

「梅雨だしな。洗濯物が乾かないのなんの……」

「大変だねー」

「他人事だな、おい」

「そんなことないよー。ちょー心配」

「はいはい」

「あっ」

「なんだよ」

「今日って何日だっけ？」

「今日は十五日、ちなみに降水確率は百パー」

「十五日かぁ……」

「なんかあんのか？」

「いや、もうすぐ夏だなぁ、と」

「まぁ、そうだな」

「去年の夏は……あれ？　あたしってまだ一年……」

「とりゃっ」

「あいたっ！　頭はやめてよー、頭は」

「あ、悪い。時空の流れ的につい……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8260o/

今日も平和だ、向島一家！

2011年6月15日00時18分発行